

2,500-90

# 讀書法序



文章を作るに法あり、議論を爲すに論法あらば、書籍を讀むにも豈

亦法なからんや、殊に今日の如く著作の極めて盛んなるに於ては、此

種の法あるを要するや尤も大いなりと、本邦にも此類の著なくんば

有るべからず、徒らに愛翫し或は珍重するのみならず、古物家の古器

と云ふものは珍らしかると何ぞ擇ばんや、多く讀みて考がふる

こと無きは多く食ふて消化すること無きに同じ、唯に滋養の益をさる

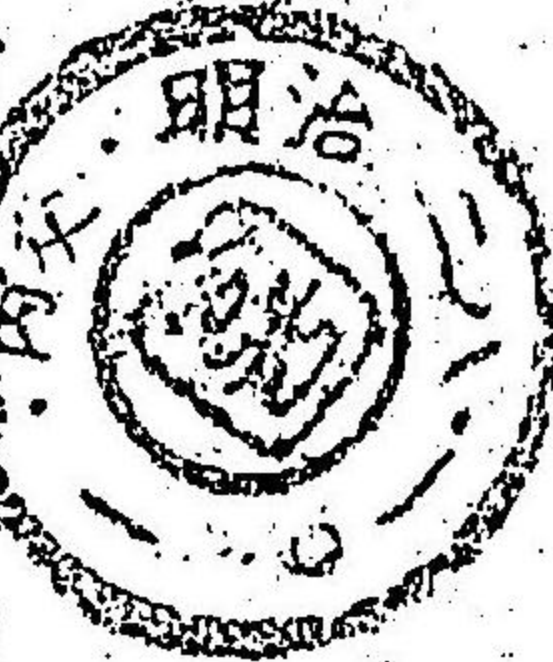
却つて腸胃を害するの大損を蒙むらん耳、

乘勝方酣戰、

終日在書案、

至哉天下樂、

“ Aimer à lire, c'est faire un échange des heures d'ennui ”



2  
ni que l' on doit avoir en sa vie contre des heures délicieuses. " (Montesquieu.)

と云ふが如き(歐陽修)、

人生識字憂患始

" O Ignorance I thou art the fallen men's best friend ! "

(Henry Kirk-white.)

と云ふが如き(東坡)は蓋し其兩端を詠せし者なり、此兩端を叩いて其中をどらば、讀書の功益茲に生せん、其中とは何ぞや、曰く、樂むべきは之を樂み、憂ふべきは之を憂ふ是なり、之を樂み之を憂ふるの道如何ん、曰く讀書法是あり、

明治廿八年七月卅日

高橋 五郎

### 緒 言

現今書籍の出版せらるゝもの汗牛充棟管からずと雖も割合は價值なきもの甚多し、若し一々古來の群書を繕讀せんと欲せし恐らく一生を費とも尙は能はざらん、而して今日都鄙數萬の青年の無益の讀書に貴重時間を徒費し頭腦を徒勞せると幾許ぞ、されば何を讀み又如何に之を研究せんかとい讀者必要の問題を知らずや、本書を出版せる所以は實に此問題を解釋して讀書家の研究を助くるに在り。

本書は蘇格蘭人技藝學士、法學博士、エヂンブルグ官立醫學院學士、古物學會々友なるダビット、プノイド氏の著はしたる「文學の道」なる書籍を主とし其他英米の讀書社會に行はるゝ數書を斟酌して譯述したるものなり、但し間々卑見を加へたる所あり。

明治廿八年八月

星野久成識

讀書法

目次

第一章	一般の書籍	一頁
第二章	歴史	二五頁
第三章	傳記	三八頁
第四章	小説	六四頁
第五章	詩歌	九二頁
第六章	戯曲	一二九頁
第七章	演説	一六〇頁
第八章	心理學	一八六頁

第一章	二章	三章	四章	五章	六章	七章	八章
一	二	三	四	五	六	七	八
...	...	...	...	...	...	...	...

# 讀書法

(一名學問の捷徑)

星野久成 編纂

## 一般の書籍



現今讀書の大利益あるは人の既に知る所あれば茲に贅言を費すに及ばざる如しと雖も乍ら暫く無教育者と有識者とを對照して更に注意を喚起せしめよ。

先づ無學の野人を看よ、彼は書を讀まず、理を考へず、彼の知識は尙  
 限るに止る、腦裏に浮ぶものは田舎の光景に非ずんば原野の獸畜の  
 み、親戚隣人の相貌に非ずんば農業の慣例のみ、遠隔過去の事は全く  
 夢想せず、其精神は目前の範圍を出でず日々運動する一小天地に限れ

279  
4

り。

今眼を轉じて好學の人を看よ、彼は穎敏の頭腦と交感の心情と活潑の想像とを具して一室に靜座し、周圍には異種異類の奇書珍籍を羅列す、實に其人は魔力を有する如く、其書は驚くべき魔術を藏むるに似たり、開卷一讀せば須臾にして塵境を脱し飄々乎として天外に遊ぶの感あり、讀で外國の記事に到れば忽然として皚々たる雪山に登り白熊の氷原に徜徉するを認め、忽にして渺たる綠原に出で炎熱燬くが如き赤道地方を過ぎ、或はアルプスの嶮を攀ち或はナイルの源を探り、海に陸に仙遊し恍惚として心飛魂躍。刮目一番史を讀で古今の成敗得失を考ふれば忽歡忽悲、覺へず案を拍て快絶壯絶を呼ばしむるものあり、佛の革命、米の獨立、感慨奚ぞ堪へん。喫茶一盃文學書を開けばセキスピア、ペーコン、カーライルの諸哲に面接し其大理想に鼓吹せられ、豁然とし

て心氣膨大し或は緻密なる思想を凝し、宛然自ら高潔偉大の人物と爲りし心地せん、好學者の心情は斯くの如くして成長し斯くの如くして擴張し、遍く古今に涉り遍く東西に通じ、古人と語り先哲と交る、元來朝露の如き有生物にありながら永遠全知ある神の如き屬性を分有するに至らんとは、噫奚ぞ夫れ爽又快なるや。

由是觀之書籍は學者の手中に於て殆んど魔力を有するの器具たるや疑なからん、然れども今二箇の重要なる問題の目前に迫るあり、曰く如何なる書籍を讀んか、曰く之を讀む法如何、

## 第一項 如何なる書籍を讀んか

此問に答ふるに當り大困難を感じるハ書籍の數の限なき事あり、モトセス以來人間は斷へず書を記し今や著書の盛なる昔日の比に非ず、著

書の嗜好は一種の傳染病とありたり。此の如き有様にては著作の罪を犯さる人殆んど之かきに至らん。若し其人ありとせば非常の克己を有し他人よりも一層賢明幸福の人なりと謂はざる可らず。凡そ人異おれば讀書の法亦異なるなり。或人は高尚的に構へ、あらゆる新書を購求して書架に飾り決して之を開かず。蓋し其中の知識の散失せんとを恐るゝからん、而して群書の中央に静座し其外装を眺めて實際既に學びたりと想像せり。或人は稍活潑にして手に觸る書籍を悉く讀了し得々として讀書を好むと稱す。恐らくは然らん、然れども奈何せん讀書其物は彼を好まざると見へ瞬間にして消失し彼の腦中に留るとかし、或人は最熱心に月刊週行の雜誌を讀み、自ら新説と稱するも其實多くの未熟の斷篇片説に過ぎざるものを讀み、以て自ら斬新奇拔と信せり、彼は雜誌學者あり、彼は一帽を被り一對の半靴を穿ち以て悉く歐人の

風を得たりと爲す所の半裸体の蠻人の如し。

以上の方法は固より満足ありと謂ふ可らず、眞の讀書法は二箇條より成立す。(一)先各種の文書中より標準的著書の一二を撰で讀むべし

(二)次に自己の精神を特に傾向せしむる部類に其範圍を限るべし、此二箇條は吾人をして學問の目的を達せしむるものにしてジョン、ヌチユアト、ミルの所謂凡て學者は普通的知識の範圍に通達すべしとの意に應せり、即ち「何事に就ても一事を知り、一事に就ては其悉皆を知る」と是あり「The knowing something of everything, and everything of something.」(一)を吾人をして先群書中より標準的著書を撰拔すべき方法を思考せしめよ、人の其意見に於ても特質に於ても交互に摸倣する天性あり、且人は性來懶惰にして自ら一觀念を造るの勞を執るよりも寧ろ既存の觀念を利用するの弊あり、是以一説は一の虚妄なる頭

腦より他に反響し終に一政黨の全体に普及する事は吾人の屢々聞知する所なり、著作者亦此弊に陥り相互に摸倣し、一問題を同一の立脚地より望見し相互の著作を読み、有意又は無意に交互の説を借用す、是れ恰も盜賊が金板を盗み所有者の記號を抹殺せん爲め之を鎔解し新文字を刻するも其實質の毫も以前と異ならざるが如し、吾人若し特殊の問題に關する諸書を通覽せば萬篇一律轉々倦怠に堪へず、所謂平凡なる換骨脱胎なるのみ、此時に當り吾人を助る者は標準的著者あり、彼の吾人心意の錯亂と苦死とを救ふべし、彼の自家の専務とする範圍に就き文學の無限ある原野を探險し、活動不撓の精神を以て穿鑿を重ね、不滅の天才を以て各書より精を抜き粹を取り、而後之を自家の知識に入れて更に鑄造し、自家の新觀念新美性を之に加へ、斯くして有ゆる善美の合躰なる一著作を出す、彼は一時の著作に反しラスキンの所謂一

7  
 代の著作を出す、斯る標準的記者は憫れにも惑亂せる讀者に一大恩恵を興ふるや疑なし、彼の書は平地の中央に崛起する高山の如く又燦爛たる天上の光輝を此世に興るが如し、彼の書は地球上諸帯に産する植物を悉く一場に集めたる庭園の如し、彼の書は自ら光熱を放つ恒星にして他の書の彼より光を借來る惑星の如し、彼の書は天賦の主君、人類の代表者にして特に天上より智慧を賜り權威を興へられ各人の心情を支配するものなり、先づ英文學に就て言へば、セキスピア、ペーコン、ミルトン、ギッボン、バルンス、スコット、カーライル、エマソン、の諸書を熟讀せよ、之を集合せば英文學の全躰を形造るを得ん。故に余は青年好學の士に此等の雄偉傑作を讀んことを忠告せんと欲す、若し悉く之を讀む能はずんば少くも一書を読み、之に全力を注ぎ、汝自身を著者の位地に置き、一心に彼の觀念と感情とに従ひ、恰も空氣

を呼吸する如く彼の精神を呼吸し、彼の全著を汝自身の一部とさせ、若し人汝が多数の書を知らざるを誘ふとも決して心を動す勿れ、或人老齡のホツブルスに向ひ何故多く讀まざりしやと問ひしに彼曰て曰く「なに多く讀めど、余若し他人の如く多く書を讀みしからは余亦他人の如く無知たりしからん」と、拉丁の諺あり曰く「一書の人を恐れよ」と、若しセキスピアを精讀し、其結構を捉へ、其品性を解剖し、其最高の思想を探り、其最深の感情を測り、其最微の意匠を穿つの人、實に恐るべき敵手なりとす。

扱既に標準的著書の一二を熟讀し尙ほ他書を通覽せんと熱望せば汝の心の傾向に適する部類に讀書を限るべし、然れども茲に起る問題あり、「如何して其傾向を發見せんか」、乞ふ是より此問題に答ふる所あらん、或人の自己の愛好する書籍を後進者に示し以て自己と同一の結果を得

んとを勸むと雖も、凡そ人各々特異の嗜好を有すれば甲を満足せしめし自得法も必ずしも乙を飽かしむる自修法と爲すを得ず、數人の採用せし模範に則りて萬人を同一規に律するの至當の事に非ず、是れ事物の順序に逆ひ、天然の理法に戻る者にして斯の如くんば世界は單調無味となり凡庸復た觀るに足らざるべし、吾人は前記の如き屈指の標準的著作の外に何事をも諸人に指示すを恐れざるを得ず、否寧ろ吾人の言ひんとす、何人の愛好する著作にせよ決して之を當然無謬の者として採用すべからずと、又手當り次第に開卷して一書又一書と轉讀すべからず、又目的なくして妄讀すべからず、青年よ、汝の時は貴重あり貴重あるが故に益々讀書を撰擇せざるを得ず、乞ふ汝の研究法に分業の原理を適用して最も汝の能力に適合する一種の書籍に汝の注意を限局せよ、今讀書の撰擇に關し特に三個の要件を掲げん、讀書は



## 第一 興味あるを要す

## 第二 心意力を活動せしむるを要す

## 第三 吾人をして日々の義務に適用せしむるを要す

讀書は右の三特質を具有して其一をも缺く可らず、乞ふ其必要なる所以を示さん

第一、汝の撰擇すべき書籍は汝に興味を興る者に非ずんば、不可なり、セキスピア曰く愉快の在らざる所には利益を生せず、要するに乞ふ、汝の最も感動するものを學べ、

“No profit grows where is no pleasure ta'en.

In brief, sir I study what you most affect.”

若し食慾をくれば何を食ふも汝を養ふ可らず、若し自ら讀む書籍に興味を有せずんば其讀書無益なるべし、若し興味を感せずんば心意を開

く可らず、心意を開かずんば一も觀念を得べからず、假令其書籍は高尚なる思想感情に充ちたる一大著述たるにせよ、汝に取りての只一塊の印刷紙に外ならざるべし、之に反して若し讀書中汝の心を傾注せしむるものならば其書の適當なる書籍の第一資格を具ふる者なり、然れども此は第一資格にして未だ必ずしも是を以て他資格の有無を判す可らず、蓋し或空虚なる小説の如きも興味を有すれども是れ只汝の貴重なる時間を殺すに過ぎず、故に只興味のみにては未だ以て満足すべからざるなり。

第二、讀書は心意の諸能力を活動せしむる力あるを要す、

實に眞正の著作の著者の精神を顯現せる者にして其脳髓に閃きし思想や其心臓に響きし感情の言語文字の中に包藏せられ、其潜伏せる精神の時を得ば直に發出せんとせり、今若し此著作を讀で著者の精神に觸

接するを覺へ自然に著者の思想感情に悟入するを感せし、該著者の汝と同種の精神を有し該書の最も好く汝の能力に適する者なりと斷定するを得べし、而して若し該著者がカーライル或ハエマソンの如く紙上に大思想を散布して汝の心を活動して眞理界に向て發見旅行を企てしむる如き者ならば、該著者は大教師の最要資格を具る一人なりと謂ふを得べし、然れども此特質も未だ以て全く充分なりとすべからず、何となれば該書にして一方に偏せば此世を神に棄てられたる混沌界の如くに現出し、人間を無慈悲なる運命の犠牲の如く現出し、不平怨恨を以て汝の心を毒害するとなしとせざればなり。故に讀書の尙ほ他の要件、即ち汝をして日々の義務に適用せしむべき性質あるを要す、畢竟生活の大目的は考るに非ずして働くに在り、學ぶに非ずして善良且高尙とあるに在り、故に書籍の最上の價値の常に

其實際的有要に在り、即ち若し小説ならんに汝の思想を多忙の俗事より轉じて汝の心の彈力と調子とを恢復せしめ、或は歴史ならんに汝の嗜好を高め鍊り意匠を美妙ならしめ、或は宗教上の著作ならんに汝をして蹶然起て私慾を離れ献身に移らしめ、其他益々汝を喜ばしめ、或は樂しましめ、或は同感せしめ、或は其美を貴重せしめ、或は善良高潔なる威風に従はんと決心せしむるときは書籍の最高目的の既に達せられたるあり。

然らば以上の者の總て適當ある書籍の具有すべき三要件なり、如何なる書籍たりとも此三要件を悉く具有するときの安全に採用すべき讀書たるを知るべし、而して之に次ぐ要件の撓まず忍で其事に従ふに在り、汝の進み入りし境界の初め奇異にして稍無味の如く感ずるとありども

愈々習熟するに随ひ愈々愉快と爲り、終に汝の本質に於て全く自ら感動するに至るを常とす、而して汝の知識の收縮せんとを危惧する勿れ、凡て學問の線路の或他線と會合交叉するものあれば汝の自己の部門の特別の知識を得る際に、他の部門の一般の知識をも造るならん。今や吾人の何如なる書を讀むべきかを考察したれば此より如何に書を讀むべきかを示さん。

## 第二項 如何に書を讀むべきか

人に依り讀書の方法必ずしも相同じからず、或人の單に印刷したる文字中に或秘力ありと信する如く、一卷の數葉を反覆熟視し以て知識を得んと冥想せり、斯く一題目に耽る法の腦髓の散亂せる人に推薦して屢々功あり、又或人の發見を事とし或特別の知識のみを求め恰も銃に裝藥する如く機到れば一發して復た餘すなく其空虚故の如し、又或人の諸種の書籍を讀み異種多様の事實を腦髓に充たし却て特別の用に供し難く「讀書の囚人」ある稱を得るに至る、今吾人が推薦せんと欲する讀書法の甚だ正確にして之を七種の要項に分つ。

(一) 一書を閱せんとせば先づ著者に就て知る所あるべし  
若し自ら知る人の著書を讀むときは自ら知らざる人の著書よりも遙に興味多し、即ち其語る所其引用する所を容易に想像し得べし、故に可成的著者の傳記を知り、其生活、品性、及び該書を著せし境遇を學ぶを要す、然るときは其書を讀て一層愉快を感じ利益を得ると多し。

(二) 注意して序文を讀め

序文を看過する人多しと雖も吾人は之を讀むを好學者の證據と爲さんと欲す、著者は其序文に於て該書を著せし動機と其理由とを記して一

層吾人の興味を増進して預知する所あらしむるものなり、伊太利の一記者は序文を書籍に味を附る香料なりと稱せしが吾人は寧ろ之を食慾催進者と稱せんと欲す。

(三) 汎く目次を検査せよ

若し序文を食慾催進者とあざば目次は献立表にして食物の種類を示し何を食ひ何を辭すべきかを決せしむるものなり、又目次は地圖の旅行者に何處を経て何處に達すべきかを知らしむる如し、吾人旅行を了りて再び地圖を開き自ら經過せし道路を追索するは頗る愉快にして有益なり、之と同じく一書を讀み了りし後更に目次を閲し方に研究したる事の要概を視察するも亦可なり。

(四) 汝の讀む所に全力を注げ

著書は著者の精神の最良ある作用を顯はすものあれば、之を了解する

爲めには吾人自身の境遇を離れ自己の雜感を棄て自己を著者に投入すべし、凡て著者の思想の方向に従ひ凡て其觀念を明に曉り凡て其感情を共にすべし、然らずんば之を讀書と稱するに足らず、斯の如く讀書に熱中したる例證數多あれども今其一を擧ぐ、伊太利の大詩人ダンテ嘗て或大行列を觀んとて市街に行きしに、之を待つ際或店に到り一書を取り之を開きしに、始め興味を覺へ次に全く熱中し之を讀了るまで餘念なかりき、暫くして翻然と絶息者の蘇生せし如く始めて周圍に注意せしに、彼が讀書に耽りし間に待設たる行列は既に彼の前を過ぎしが毫も彼を感ぜしめざりし事實を知り得たりと云ふ。

充分著者の意味を了得せん爲め古風の人ハ聲高く讀書し恰も其知識は耳を経ざれば腦髓に達せざるもの、如し、是れ老農が冬夜爐邊に安居し兒女に對し誇り顔に朗讀するの類なるのみ。

(五) 讀書の際最有益の語句を筆記せよ

手帳を備へて汝を刺激せし議論文章の要點を簡單に筆記すべし、若し手帳を備るを厭ひ鉛筆にて欄外に符號を記すべし、何人も場合に應じ賛否、明暗、強弱、巧拙等を表する符號を自ら發明するは容易の事のみ、符號を記する方法は種々ありと雖も孰れか一法にて之を爲さざる可らず、然らずんば巧なる讀書家とある能はじ、蓋し辨別する所あらずんば何を以て知識を得んや、若し或區別の符號を附せずんば何を以て此等を識別するを得んや、大學者は概ね皆大に符號を用ひたり、ロツク、サウセイ、サーウヰリアムハミルトン等の讀書の際未だ曾て手帳を離せしとなく凡て有益と思考せし事實觀念を之に記入して將來の用に供したり、彼等の記憶力は強大なりしといへ最も熟慮して其記憶力を補助し無益に之を苦しめざりき、彼等は内部の記憶を大に煩

勞すべき精細ある要件を保存する爲め外部の記憶として手帳を用ひたるなり、但し必ずしも長き註を記入するに及ばず、カーライル嘗てコロムウエルの書翰を閲してリチャード・メイヨルに贈りし書中左の文句あるを見たり、「君よ、愚息ハ往て貴下の令嬢に侍せんとを大に希望せり、余の知る彼の此處にて業を執るよりも多く其の事を思へり」、カーライル此句を讀み「彼の夫の娘を愛するると其職務に勝れり」とて「ゼー、ドツグ」即ち犬と附記したりと云ふ。

(六) 汝が注意したる事實の概要を汝自身の言語にて摘記せよ

書を読むに隨ひ數多の事項に符號を付するのみにて未だ以て足れりと思ふべからず。蓋し其事項の亂雜の狀を以て記憶に滞在するとも暫時にして消失すべければなり。故に汝自身の方法を以て之を整頓せざる可らず、若し之を整頓せば其事實を一層完全に汝自身の所有とあすを

得べく、汝自身の言語を以て之を表白せば其事實を一層明白確實と爲し汝の記憶を固定するを得べし、グロト氏曰く自身を或趣意の主人公と爲すの最良法の坐して其由來を自身に與るに在り是れ余の常に認めし所ありと。

然れども此忠告の全く實行し難しと言ふ者あらん、其理由を聞くに曰く之を記するの余暇なし、曰く筆墨必ずしも傍に在らず、曰く煩はしく面倒ありと、然れども若し筆記の勞を厭ひ、茲に之に代用すべき方法あり、則ち若し概要を筆記し能はずんば之を口に演ぶべし、今試に一書を讀み其趣意を腦裏に藏むるとき之を正しく且明に一友に語るべし、勿論之を行ふに適當なる友を撰むに注意せざる可らず、若し愚鈍凡庸の人に語らば彼等の汝を學識に誇る者と爲し反て汝を嫌はん、故に汝と同種精神を有する人を撰みて汝の讀書より得たる利益を之

に分與すべし、然るとき其人を教導しながらも亦汝の知識を一層確實となすを得べし、實に此種の教訓の夫の慈善の如く受る者にも與る者にも共に益ある事あり、此習慣たる或人々が驚くべき記憶力を養成したる理由の一なり、彼等の其見聞する所を出遇ふ人毎に談話し是に由り決して腦裏を脱せざらしむ、實に彼等の銳意熱心なる學童が道を行くにも日課を誦し家内の人を捕へて頻りに談話し以て日課を其記憶に銘するに似たり。

(七) 讀書の結果を日常の義務に適用せよ

諸君の皆知らん父が其子に歩行を教ふるや小兒の腋下を支へ徐に曳き以て小兒をして他人の眞似を爲し覺束なくも兩脚を運ばしむ、是れ最要の運動にして大に柔軟なる肢節を堅固にして其命に従はしむるものなり、然れども若し此他に何も爲す事あからんに小兒の何時迄も小

兒にて終らん、然るに漸々父母の嚮導を離れて自ら脚上に立ちて歩行を模擬し歩一歩づゝ遂に自得するに至る、讀書家も大に此小兒に似たり、其書を讀むとき實に著者の精神を用ひつゝあり、又著者の讀者の精神を誘導し自家と共に進行せしむ、是れ讀者の心力を發達する所以なり、然れども此他何も爲さざらん、讀者の知力上單に小兒にて存せんのみ、故に次第に自ら著者より離れ自ら思想し、著者の言語や思想を模擬するに非ざれども其思想の法に従ひ、以て著者を偉大ならしめ資格——各物の眞美を完全に測定すること、各事に完全なる見解を下す事、思想に秩序を立る習慣、明瞭精密に説明する力——を日常の行爲に適用せざる可らず、古來の大精神と交通せし後の一層智を明にし情を大にし行を高くせし事を自ら實際に證明せざる可らず、實に是れ書籍より得べき一大目的なり、人をして單に迂儒たるに終らしめば

書籍の無用の白紙たるに過ぎず。

文學に由り人性を學びたる偉大なる實例のウオーター、スコット氏に過ぐるものなし、氏は嘗に故國の光彩を發輝して各國住民の注目を惹き蘇格蘭の事々物々に新顯象を興へしのみならず其宏大なる記憶に無量の文學的知識を蓄へたり、而して凡て此名譽と知識とは彼を超然として傲慢に陥らしむるとなく其天賦の徳性を發達し彼をして一層慈愛、親密、快活、淡泊ならしめたり、ロルド、コックハルン曰く余が千八百二十八年に彼をアポツフォルトに訪ひしに彼の性質の素樸なるの殆んど信じ難き程にして其の無双の天才と共に兩ながら驚嘆すべしと。

今や余の「何を讀むべきか」「如何に讀むべきか」の二大疑問に答へ明瞭なる讀書の法を指示したりと雖も、恐らく諸君の此法に従ふに當り二

箇の困難あるを看ん、(甲)或人曰く雜讀は如何、新聞雜誌或は遊戲の書類を閱讀するは不可なるかと、否斯種の事の甚愉快且有益なるべし其功能の啻に刻苦勉強の後に吾人を慰め氣力を恢復するのみに止まらざるべし、嘗てポツフィンと云へる人の塵埃の堆積を精査淘汰して遂に富裕とありし實例もあれば此法に従ひ空談虚説の文書を涉獵するも遂に賢人となるとなきに非ざるべし、然れども之を讀書と稱す可らず、寧ろ遊戲若くの鬱散と呼ぶべし、是れ恰も食後に食ふ果實の主食に非ざるが如し。

(乙)又或人の言はん斯る嚴則に従て讀書するの行ひ難き事なり、傳記や序文を閲し記號を附し其概要を摘記する等誰か能く悉く之を爲し得んやと、余答て曰く之に處する只二途あり乞ふ其撰むに任せん、足下若し怠惰無頓着ならば、若し一層賢且善あるを望まざれば、別語之を言

へば若し愚人鈍物たるに甘んせば、則ち依然手に觸る諸書を夢想し常に無知に終るべし、然れども足下若し活潑銳意ならば、成功を望まば、理性動物の名稱を貪らば、若し善き忠告を重んじ之を實行する決心あらば則ち善く定めたる嚴則に従て讀書すべきのみ、凡て善良ある書籍の上記の法則に従ひ研究せざる可らずと雖も、各種の書籍の又自個固有の性質と之を研究すべき特別の方法あり、果して如何、是れ余の以下に記述せんと欲する所あり、然れども諸種多様の文書を一々自然の順序に従て論述するの到底爲し難き事あれば今只最通俗なる數種の書類を研究して止まんと欲す、其種目左の如し  
歴史、傳記、小説、詩歌、戯曲、演説、心理學、

## 第二章 歴史



歴史の研究の吾人の性質の一大法則に基くものなり、夫れ人の自個の狭隘なる經驗を以て満足せず他人の經驗を分取し之を自個に附加せんと欲するものあり、而して人の能く其精神を体外に奔せ千里の遠に至り他人の心中に入り他人の眼を通じて観察し他人と悲喜を共にする如き驚くべき能力あり、此力を同情と名く、而して此同情の人情の程度に應じて差異あり、若し其人物劣等ならば其同情の自個の領土を越る能はずと雖ども、高等なる人に在ては其同情の自個の小範圍に限らず普く全地に及び、坐ちから議會の演説を聴き、或はスタンレーと共に亞弗利加の山野を跋渉し、或はバルガリヤノ平原に流血の洪水を現じたる激戦を観察すべし、然れども最高の人物に在ては其同情たる世界と廣狹を同ふするのみならず時の古今と其長短を同ふし、能く知り能く感じ、如何なる國も之を度外視せず、如何なる風習も之を無用視せず、地下に沈黙せる古人と語り過去の遺骸に生命を興へ、既に此の世を去りたる者の形狀、衣服、風習を視察し其舉動を穿ち其の感情を領得し以て常に全知遍在なる造物主の意志を窺はんとせり。

然れども次に起る疑問の此等の研究を爲す最良法如何と云ふに在り、茲に歴史研究の通例學校に於て學ぶ如くすべしと謂ふに非ず、若干の人名年月を記憶し之れを腦中に紛亂錯雜の狀を以て貯蓄すべしと謂ふに非ず、別語之を言へば腦髓を芥溜に變ずるの謂に非ず、之れより一層濶大一層困難なる事を爲すに在り、即ち吾人自身を現今より過去に運搬し精神上古人の中に生活し、其容貌、家屋、風習及一般の狀態に注意し、其見地より觀察を下し、斯くして其功果及失敗の正當なる計算を爲すに在り、是れ實に過去を覺知する法なり、過去を覺知し實現し、朦朧秘密の幽界を變じて光彩燦然たる明界と爲すの實に難事たり、但

し全然爲し得ずとも其一部の之を爲すを得べし。

勿論主要の方法の過去の事實を一連の文章に編輯布置したる大歴史家の作を學ぶに在りと雖も、是れ各學生の能く知る所なれり今更論するに及ばず、然れども茲に動もすれば世人に看過せられんとする重要な補助法あり吾人特に之に注意せざる可らず。

過去の全く過去せしに非ず少くも其一部分の今尙現存せり、吾人の古人が血を流し骨を埋めし戰場、居住したる城址、其他武器兵器等の遺物を親しく觀るを得べし、此等の現今に於る過去の眞正なる殘片なり、故に吾人一國の歴史を學ぶに其甲冑兵器等の遺物を實驗せざる可らず、若し能く之を爲さば二個の重要な結果を得ん。

第一、吾人其國史の或光景を腦裏に描くとき凡て詳細の事想像的に陥らず、其中の或物の現實とあるべし、而して現實なる者の骨格或の

木匠の用を爲し其周圍に諸物を附着せしむるを得べし、歴史の研究の恰も古物學の研究に等し、試に古物學者に若干の化骨を興へなば彼の骨格を構造し之に肉を被ひ以て完全なる動物の見本を示すあらん、之と同じく譬へば歴史家に一箇の戰場と一具の甲冑と二三の兵器とを興へない彼の想像力の助を借りて兩軍を召出して武裝を被らしめ、恰も戰爭當時の如く進退運動を示すならん、其例としてスコットのフロツデンの戰記を看よ、彼の古今無比の敏腕を揮て夫の錯亂甚しき戰爭を精細に記載せしや驚くべし、是れ蓋し單純の理に由るのみ、即ち彼の蘇格蘭の史上の事實を熟知せしのみならず屢々戰場を訪ひ實に其戰に用ひられし武器をも目撃したりしかり、其戰を記するに當り英蘇兩軍彼の心眼に映出し其運動一々指點すべく、英軍マイル河橋を渡り蘇軍之を襲ふの機を失ひし等身自ら之を目撃したる者の如し奚ぞ其精且詳

なるや。

第二、此等の遺物の雷に過去を吾人に現出するの骨格或の木匡と爲るのみならず想像を刺激し現實の力を高むべし、眞に此等の遺物の死者の陰影を目撃せしむる魔物なるか如し、吾人古戰場に徘徊し頃刻沈思するときは古英雄の精靈髣髴として吾人の周圍に呻吟するを想はずんばならず、吾人古代の刀劔を執れば恰も戦死者の手に觸るの感あくんばならず、故に若し歴史の實を全く了解せんと欲せば其書籍を熟讀するに止まらず其事の起りし現場に行き之を研究せざる可らず。

吾人をして過去を覺知せしむるに大に力あるを以て特に記載すべき一遺物あり、舊き新聞紙の類是なり、新聞紙の他の文書と異なり一記者の著作に非ずして實に時代其者の著作あり、勿論雜事の編輯の數人の手に成るべしと雖も其人々の唯筆記者たるのみ、唯筆を執て唯時代を

描出するのみ、而して公衆の概ね其記事の誰の筆に係るを強ひて問ひざるなり、恰も是れ日々に其需要を報し其事件を記し其名士の言行を載せざるを得ざるもの、如し。時に或記事の過大にして且虚妄なるとあるべしと雖も、概するに新聞紙の眞實にして時代自身の手成れる時代史ありと謂ふべし、故に吾人舊時の新聞紙を讀むときは恰も當時の空氣を呼吸するの心地すべし、紙上に當時の需要に應すべき各種の廣告あり、其奇事異聞の今尙は斬新の感を惹起すべく、名士の熱心活潑なる言論の今尙は空中を劈く拍手喝采の聞ゆるものあり、而して次第に號を逐て轉閱すれば日又日、週又週、宛然として眼前に過るが如く、髣髴として大事件の經過するを見ん。

若し該新聞紙の記事が吾人の熟知する場處に係るときは更に吾人の感動を増さん、數世紀前の戦闘史を讀めば興味あれども其戦闘の起りし

場處を知るときは更に興味を深くすべし、議會や會堂に於る諸名士の演說筆記を讀めば愉快かれとも其雄辨の鳴り響きし場處を知るときは更に愉快を増さん。

此他尙は歴史の研究に於て看過せられたる過去の記念物あり、一國の詩歌、殊に俗謠是なり、エマソン曰く吾人の最善の歴史の尙は詩なりと、是れ大に眞理を含めり、詩歌の最深の感情——時代の極意——にして人口に傳唱され不滅とあされしものなり、要する詩歌の眞正純粹の生命 *elixir vitae* たり、詩歌中には過去の風俗、氣質、好惡、哀樂、等を含み之を讀めば其精神に直入して既往の空氣を呼吸するの感あり、今一例として蘇格蘭の詩家バルンスを舉ぐ、彼は實に歴史家なり、彼は歴史家たる者が動もすれば帝王、戦争及政治に偏して人民の狀態を看過し易きことを云へり、彼の詩は自身の感情と想像とを含むのみな

らす、十八世紀の蘇國農夫の生活を明瞭に描寫し田野、家庭、市街、寺院等凡ての場處と凡ての狀態とに於る生活を顯はせり。

上述の如く吾人は須らく歴史上の場處と遺物とを調査して過去を覺知すべし、而して過去を覺知するときは一層善く歴史を實際の事實に變するを得べく、又事實の眞假善惡を分別するを得べし。

然れとも或は言はん、是れ恐らく甚善き歴史研究の理法からんも果して實行し得べきか、舊時の新聞紙と詩歌とを檢閲するは了解し得る事かれとも有ゆる歴史上の場處を尋ね有ゆる歴史上の遺物を觀るは到底爲し得べからざる事あり、夫のユダヤ人の如く世界を遍歴し名所舊跡を探究するに時と金とを費し得る者は天下幾んど稀からんと、吾人答て曰く假令へ吾人は此法の全部を實行し得ずとも其一部を實行するを得べし、吾人は是に由り世界の歴史を熟知し能はずとも最要最利なる

もの即ち自身の國土及市邑の歴史を熟知し能ふべし。

若し吾人或歴史上の大都會に生活するときは大に上述の研究法を實施するに容易ならん、例へば京都、大阪の如きは名所舊跡に富めり、又博物館に往けば歴史上の軍器其他遺物を視察するを得べし、而して若し鋭敏なる想像力を以て舊跡遺物を視察せば當時の景况宛然眼に映るの思あらん。

然れども以上の諸法に依り歴史の知識を得し後は他の知識と等しく之を實際の生活に適用せざる可らざ、吾人の周圍に在る實際活動の歴史を了解し得る爲めに之を利用せざる可らざ、エマソン曰く學生自身の生活は本文にして書籍の其註なりと、吾人の今此觀念を敷衍して言はん、凡て目に視ゆる萬物は（學生自身をも含みて）本文ありと、夫れ萬物の未だ完了せざして常に記述を待ちつゝある廣大なる一歴史なり、其紙面とは此廣き地球の表面なり、其記者との自然の諸力（人を含む）あり、其記述する文字は諸種の自然的及社會的の顯象あり、而して其註解者の尋常の歴史家あり、故に吾人の此註解者より得たる知識を以て吾人の周圍に在る明白なる大歴史を了解する爲めに用ゆると必要なり、吾人は此知識を左に掲ぐる種々の方法に用ふるを得べし。

第一、吾人の自己の特權を貴重する爲めに此知識を用ゆべし。

試に讀者を蘇格蘭人と假定せよ、其人は自國の歴史を讀むよりして其現位地の價值を貴重するに至らん、蘇國は初め山林沼澤の荒野に過ぎずして、住民殊に南部の居民は痛く優族たる英人の侵害を受け、戰敗れて又戰ひ毫も屈することなく自由を保つ爲め血を流し骨を晒し、警火一たび山上に燃ゆれば住民居宅を焼き家畜を山間の城砦に移し以て敵をして飢餓に陥らしめ、敵の糧に苦んで退軍するを見れば再び舊屋

を修繕し耕作を務めしと云、此等の事實を讀了し其光景を想像して自得する所あらば其眼に映る所如何、其心に感ぜる所如何、身の安全に爐邊に在りて安樂椅子に覺るも慄然として戦争の活劇に繋たるゝの感なくんばあらず、從て周圍に對し以前よりも一層の興味を帯びざるを得ざるべし。

第二、歴史の研究者は過去を以て現今を解釋すべし。

吾人過去を了解せざれば固より現今を了解する能はず、現今は結果にして過去は其原因なり、換言せば吾人歴史を知らざれば今日の事件をも適當に了解するを得ず、歴史の知識なき人は己れに衣食娛樂を供する事實の外は現今に就て知る所なしと雖も、歴史の研究者は他人の全く顧慮せざる時の兆候を解釋し周圍に在る事物の意味を了得す、乞ふ簡易の例を擧て説明せん、茲に二人あり相携へて舊都を逍遙すと想へ

甲は歴史を知らず乙は之を熟知する場合には、甲は空しく通過し空しく舊跡を望観するの外爲すことなしと雖も、乙は異色の眼光を放て特異なる建築物の深意を視察し、是に由て古代人民の生活の摸様を推察す、甲は過去の記録を知らずして空視し乙は各遺物の意味を了解するとせば此二人中孰れが能く現今を了解する人ぞ。

第三、此歴史の研究は日常の事業の助と爲るべし。

吾人は人を稱てし摸倣的動物と言ふと欲す、若し少しく熟考の勞を執らば凡て人の能方の其兩親及朋友を摸倣して發達せられしを知らん、若し此の如く摸倣するの機會なかりしときは其人の舉動、風習、言語に至るまで頗る相異を生じるならん、通例無作法者と共に居れば、無作法者と爲り、謹直家と交はれば謹直家と爲る、人を作るは其交友に在り、而して歴史の研究者は古來の最上なる社會と交り、最大の英傑偉

人に接し、其熱情誠意に感じ、其高風偉容を慕ひ、實に心を擧て之を嘆賞す、嘆賞は摸倣の第一階段にして彼は漸々自ら嘆賞する人の性質に感染し、其見識更に廣大となり其同情更に温熱となり、其企圖更に高尚とある、是れ自然に來るべき結果あり、是れ神が歴史を作り給ひし結果なり、斯る廣大の見識、温熱の同情、高尚の企圖は果して人生日常の事業を助ることなきか。

### 第三章 傳記

千七百二十五年頃日耳曼國のハメリンに近き一森林に一野人ありき、或獵夫の談話に據るに、此野人の十五歳位に見ゆる童子にして裸体の儘手足を用て疾走し樹木に攀登るの自在なる恰も猿猴の如く苔草類を喰へりと、彼捕へられて英國に送られしが其給與せられし衣服を引裂

き好で生食物を喰へり、彼の國王の命に依り當時の大學者にして才智あるドクトル、アルブスノット氏の教訓を受け七十歳まで生存せしが遂に會話を學ぶ能はせして死せり、此薄命なる野人の野童ピーターと名けられ人間が野獸の程度まで沈降したる著しき一例なり、何人たりとも若し孤居獨棲せし斯の如き慘狀に陥るならん、然るに吾人の吾人に先たちて世に出てたる人々の恩賜を讓受る様に天より定められたり、第一、吾人の親族朋友の恩惠を配分せらる、吾人の幼時より柔和なる手腕、温順なる聲音、笑を含む容顏に圍まれ、吾人元來摸倣的動物あるを以て自然見聞するものを摸擬し知らせ識らせ言語風習及周圍の諸觀念を採用す、此の如くして吾人の祖先の蓄積したる經驗を讓受るものなり、然れども當これのみならず、天が人の爲めに備る所の吾人祖先の蓄積

したる知識を受嗣ぐのみならず若し自ら擇まひ、全人類の蓄積したる知識をも受嗣がしむるに在り、是れ實に驚くべき事なれども果して眞ある乎、吾人如何せば人間思想の廣大無限ある海洋を窺ふを得べきか、吾人の數千人にすら一々觸接する能はず、若し觸接し得るとするも多人數の異種多様なる經驗の全く吾人を混乱せしむるならん、實に其類を同ふしたる人々の群集せる程混雜するものなし、然れども此混乱の際に立て爲すべき方法の極めて簡なり、吾人唯偉人の生涯、巨人の傳記を學ぶべし、偉人の其非凡なる心力に由り或度まで當時の有ゆる知識と資力とを支配する者にして凡て特別著明なる事變の皆彼に關係を有せざるのちし、彼の當時を包括し、模範たり、代表的人物たり、而して其言行の拔群にして記するに足るべく、又以て將來を益すべし、故に吾人若し一國の偉人の生涯に習熟せば實に自ら該國の凡ての人の精

粹を所有するを得べし、偉人の諸勢力の集注する中心あり燒點あり。是れ偉人の功用あり、偉人の散在せる群衆の知慧を綜合して之を生命ある人間の行爲と言語とに包括して何人にも一目瞭然たらしむ、是れ仁愛ある神が吾人の爲めに妙案せられたる驚くべき企圖なり、或偉人の世の擴傳ある迫害に遇ふて倒るゝとあれども而も尙ほ彼等の神の賜物にして吾人の利益に供せらるゝ者あり、通例人の此賜を用るに躊躇せざる者にして人類の特性中眞實若くの想像上の指導者に隨從する傾向は著しきはなし、然れども人類の靈智に依るより寧ろ耳目に依て導かれ風潮の儘に動搖する性癖甚強くして恰も懸鈴羊の後に歩む群羊に似たり、彼等の蠢爾として頭を低れ皆同方向に面し先導者の足跡を履み其所爲を學べり、若し一障害物の前途に横はるありて先導者が之を跳過して行きたる時の其後障害物の既に取去られたるにも拘はらざ



群羊の亦此處を跳過して行き、一頭過ぎて又一頭來り各々空に跳躍して恰も眞實の障害物を飛越せしが如く得々然として尾を掉ふの狀眞に憫むに堪へたり。

吾人既に偉人の必要なる事と他人が之に附從する様に定められし事とを考察したり、今最要の問題の如何せば此偉人を發見し得るか、如何せば偉人の眞偽を區別し得るかと云ふに在り、世の運命なる者の主として此問題の當否に依る、史を讀むに國民の全部或の一部が僞神、僞英雄、僞預言者、惡魔、欺騙者の爲めに誤まられて零落もたる悲談に滿てり、されば僞先導者の誰あるか眞先導者の誰なるかを穿鑿するの抑も吾人の義務ならずや、然れとも誰が人を瞞着する虚飾的英雄あるか詐欺的偉人なるかと一々之を列擧するの無益の事なれば今左に其三種を擧ぐ、

第一、單に同輩を越へて勢力を得たる爲めに偉人と呼べる者あり、此場合に於て成功の即ち偉大なりと想像せられたり、斯る人の最も鐵面皮の欺騙者なり彼が其位地に登りし愚民の蒙昧を利用し詐欺し廉耻を顧みざりしに由る、而して自から恬然高位を占め寄食者の之を崇拜して偉人と稱す、此種の不正ある偉人の最も驚くべき一例のナポレオン一世ありとす、彼の古來稀有なる最高尙なる大詐欺者あり、彼が微賤より起り單に人物の力を以て世人より注目せらるゝに至り佛軍を指揮し一大砲火の如く雷鳴暴風の如く歐洲大陸を縦横無盡に蹂躪し王位を顛覆し万人の膽を冷し全世界ナポレオンの外復た何人をも思ふの暇なく何人をも語るの隙なく一時世を擧て彼に心酔せしむるに至れり、然れとも畢竟彼の偉人に非ざりき、蓋し彼には一点の人情をも殆んど見出す能はず、唯其虚望を飽かしめんが爲めに冷然として幾千の人命

を犠牲に供し幾万の資財を烏有に歸し世の商工業を杜絶し得たる者の抑も之を人と謂ふ可きか、或人の彼を悪魔と稱せしが吾人の彼を食人鬼に比せんと欲す、彼の實に小説に所謂食人鬼の如し、彼の不正に膨大し慘怛たる光景を世に現はし人間の犠血に依て成長肥満し、世の人を餌食となす所の武力的食人鬼に従はざるを得ざるに至れり、若しも人をして斯る食餌を欲せしめば人類相互に食して終にキルケンニ猫が相噛み尾の外一物も残さざる如き慘狀を呈せん、世の宜く之を拒がざる可らば、

“War's a game which, were their subjects wise,  
Kings would not play at.”

第二、單に騒ぎ立るに由り偉人と稱せらるゝ者あり、喧噪の屢々偉大と誤認せらる、此種の人の政治上及社交上の諸集會に於て常に喧噪し

日刊新聞亦之を反響して數日間其所説を布演す、此喧噪的人物の奇怪の脳髓と、輕滑なる辨舌と、比類なき自負とを以て其全資本と爲し、是を以て敏捷に社界に立廻り、諸處に出没し何事にも容喙し、其本務を措て万事に干渉す、彼の好んで自ら人民の頭腦の一なりと妄想すれども實の只其口の上なるのみ、彼の自ら名望ありと想像すれども彼が肩にて風を切り大道を濶歩し得意然たる容貌を爲し、恰も萬人皆彼を眺めて「偉人某君の行くを見よ」と叫べりと自ら許すを見ればミセスポイザの汚穢なる小鶏を想出さざるを得ず、此小鶏の毎朝太陽の昇るの彼の鳴聲を聴く爲めに外ならずと思ひたりき。

“Man, proud man !

Dressed in a little brief authority,

(Most ignorant of what he's most assured,

His glassy essence), like an angry ape,  
Plays such fantastic tricks before high heaven  
As make the angels weep."

第三、單に偉大なる如く見ゆるに由り偉人と誤まらるゝ者あり、或人一商人より鸚鵡を買ひ其談話せんとを期したりしに一語も發し能わざるを知り之を商人に詰りしに商人答へて曰く談話せぬか、然り恐らく談話せざるならん、但談話するが如く見ゆるのみと、或偉人らしき人の恰も此鸚鵡の如し、彼の談話する能はず、若し談話するとも何人も其意味を了解する能はず、然れども彼の言語に顯はし難き事を思想し得るかの如く見ゆ、彼の人をして己を了解せしめず黙々裏に賢明優秀の人物あるが如く見へしめ以て世を渡れり、而して人民の其要求を容れて名聲と位地とを彼に興へたり、蓋し普通の人自ら親しく人物を試験するの勞を執らざして只之を臆測するに止まれりなり、セキスピアハ各種の人物を了解せし如くに亦此種の人物をも了解したり。

"There are a sort of men, whose visages

Do cream and mantle like a standing-pond;

And do a wilful stillness entertain,

With purpose to be dressed in an opinion

Of wisdom, gravity, profound conceit;

As who should say, 'I am Sir Oracle,

And when I ope my lips let no dog bark.'"

嘗て英國の或法律家の驚くべき英邁の容貌を具へし爲め同業社會に最高名聲を博したりしが其容貌の實に彼の財寶なりき。マコーレー言へらく何人も此某氏の容貌の半分はとも賢明なるを得ざるべしと。

以上は偽の偉人あり、然らば眞の偉人とは何ぞ、人間の最高部分なる精神の偉大なるを謂ふ、人の精神の如何せば偉大となるか、唯増加の作用に由る、即ち其精神自体より進出て他の精神と觸接し恰も之を自己に結合するものにして夫の同情と稱せらる、驚くべき力に依て之を成す、されば人を偉大ならしむる者の同情なり、小人の同情を有せず其精神自己の小天地に限り眼界狭く唯自己の小快樂小苦痛を知るに過ぎず、然れども偉人の自体のみに満足せず進出て宇宙間到處を家とし只自身たるに止まらず自身を擴大して他を己に包含せんと欲し、觀察と讀書との助を借て自身を他人の境遇に置き、東西の人民と同情し古今の人民と同情し、且同胞と同情するのみを以て満足せず動植物の地位に降りて此等を曉り此等の爲めにも感せり、又万物と同情するを以て足れりとせず天上に飛揚して造物者と同情し其攝理の秘法を窺ひ知

んと欲せり、若し渠に探究の時間と資力とを假さば其自身を擴大すると殆んど限なからん、偉人の古今東西の別なく想像に於て生活し恒に造物者の全知全能に上達しつゝあるものなり、此活る同情が偉人の本質なるとい史上に徴して昭々たり、殊に釋迦の如き耶蘇の如き其最たる者あり、又同情の大品性の基礎たるのみならず、何事に依らず大に功を奏するに必要の原因なりとす、凡て大企業家、大演説家杯の皆同情に依り鼓吹せられ自ら代表的人物として人民の思想感情に依り奮起せられし者なり、別語を以てすれば彼等の人民の道徳力、心意力を我有と爲したり、彼等打つとき衆人の手として打ち、彼等語るとき衆人の口として語る、是れ言語と其舉動とに強大の力ある所以なり、若し公開場に於る演説家が孤立して自身特有の感情のみを語るならば其演説の割合に虚弱無力ありと雖も、若し充分聽

衆と同情し自身の其同情を表出しつゝあるを知らば其演説の迅雷烈風  
 の力あらん、是れ語る者の彼に非ずして彼の口を借り聴衆の聲を漏す  
 ものなればなり、又一人あり若し群衆中に於て衆人の毫も知らず又毫  
 も管せざる過失に對し人を責むるとも其譴責の割合に微弱無効なるべ  
 しと雖、若し衆人の上に加へられたる侮辱害惡を憤慨すと思はゞ其打  
 撲の電光石火の勢あらん、是れ打つ者の彼に非ずして聴衆自ら彼の手  
 を借て打つものなればなり、

史上に於ても亦此例を見るべし、ロバート、ブルウスの勇敢なる兵士に  
 して又熟練なる將校なりしが、若しも自ら蘇格蘭の勇將たりしとを感  
 慨するに非ずんばハンソングバルに顯のせし如き明斷猛勇を示し能はざ  
 りしならん、實に壓制せられたる幾千の婦人小兒の悲鳴嘆聲の彼の心  
 臓を鼓動し、數百の壯漢が自由を望む熱情赤心の彼の腕を扼せしめた

れはこそ、彼の自身の衷に全國民の勢力と勇氣とを感したるを、彼  
 の壓制を剿絶せんと欲する自由其者なりき、斯る戦争に於ては死すこ  
 も尙は一大名譽の赫として永存する者あるを看ん

By oppression's woes and pains,

By our sons in servile chains,

We will drain our dearest veins!

But they shall be free!

Lay the proud usurper low,

Tyrants fall in every foe,

Liberty's in every blow,

Let us do or die!"

壓制の災害と苦難の爲め

奴隸の鉄鎖に繋がれたる子孫の爲め

我儕の最高價の血液を乾涸するからん

されど彼等に自由を得させたし

傲慢なる篡奪者を打倒せ

暴虐者の敵に遇ふ毎に倒れ

自由の一撃毎に得らる

我儕をして斯くあらしめよ、然らずんば死せしめよ

千五百卅一年四月マルチン・ルーテルが持説に答辨せん爲めウオルムス會議に召喚せられしに實に紀念すべき日なり、彼の貧き礦夫の子にありながら王侯、貴族、高僧、學者の面前に出て冷眼敵視せられつゝ、唯一人孤立したり、而して彼が四方敵に圍まれながら能く眩惑せず戰慄せず屈伏せざりし抑も何故ぞ、斷乎として屹立し明晰沈着なる風

采を以て持説を辨護せしに何故ぞ、是れ彼の獨り自身の爲めに辨解するに非ずして無道の僧制迷信に呻吟する基督教國民の爲めに談論しつゝあるを自覺したればなり、真理の爲め全能者の爲めに辨解しつゝあるを自認したればなり、彼の紀念すべき語を以て説を結んで曰く「故に經典の證據か或の最明白なる真理を以て論破せらるゝに非ずんば余は變説する能はず且之を欲せざるべし、余此に立脚せり其他を爲す能はず、神余を助けんと」。是れ蹂躪せられたる群衆の叫と神靈の聲とが彼の口を貫きて響き來るものなり。

然らば眞の偉人の本質の廣大活動の同情なるこそこれ此の如し、然れども此同情の何事に就ても必老しも同等圓滿に發達せられざる可らずと云ふに非ず、若し唯一方向に對して健全強壯に發達するのみにても尙ほ偉人の稱を許すに足るとあり、例へば博物學者トーマス、エドワー

ドの眞に偉人なりき、彼の幼時最も望なき少年にして勉學せざる爲め學校より放逐せられしが成長の後も纔に靴を補ふ外何事も爲し能はざりき、されど彼は實に禽獸蟲魚を好み餘暇あれば之を探究し四方に奔走して終夜外に在りて洞穴に睡り早朝家に歸るときは帽子にもポケットにも或の死し或の活る種々の見本を満たして來たれり、然るに此事も亦彼の弱点なりと人より看做されたり、彼の妻言へらく彼が世人より非難を受る一過失の禽獸を愛するに在りと、即ち妻も之を一缺點と考へたりしなり、然りと雖吾人彼の生涯を學ぶときは彼が偉人たりしを知らん、彼の最も賤しき生物に對しても神的同情を有し、通常人より最も忌み憎まるゝ者をも憫み愛する天父の如くなりき、斯の如き方法に由て偉人の成立せらるゝ、偉人の地球の表面に於て神の造られし者の中最高尙なるものあり、其他の神工に出る動物、植物、

55

星辰の如きも亦神の力を顯はすものなれとも偉人の神の自像を示し、神の如き智慧を有し就中如何なる生物に對しても廣大温熱の同情を有し、實に全能者の手工の最高最榮なる花冠たり、實に彼等の時間と空間とを照し其住居したる地上に光彩を放ち燦爛として美象を呈せしむ、吾人ストラットフォールド、アボツフォールド及ライダル山の聖地を訪へばセキスピア、スコット及ウォルツウオルスが其足跡の到る處に榮光を與へたる感慨を心に浮べざるを得ず、湊川の楠公の忠死に由て世に傳へられ赤穂の義士に由て其名高し、又偉人の歴史の暗黒界を照し過去の深淵を輝し恰も恒星が空間に散在する諸光熱を自体に聚合し赫灼として永く吾人を樂しましめ又吾人を導くもの、如し、今や吾人の何種の傳記を學べきかを決定し得る一證據を發見したり、若し傳記の主人公たる、同胞の爲めに感慨し且勤勞したる大同情の人

からんには是れ眞の偉人にして吾人其生涯を學ば、大に益する所あらん、而して次に大問題の來るあり曰く如何にして偉人の傳記を學ぶべきか、曰く充分偉人を了得すべき最善法如何、是れ容易ある問題に非ず、通常の人さへ之を看破するの頗る難し況んや自己以上の人物をや、通例人の密封したる書籍の如き者にして或激甚の事變に依り強ひて其品性の封鎖を開展するに非ずんば只其外装を觀るに止まるのみ、世に尊敬せられ有徳の士と稱せらるゝ人も一朝危急に際せば大に世評に相違するとあり、道德家、宗教家、の假面を被る人が其實貪慾無情の瞞着家たりし事の滔々として算ふ可らず、

今目前に在る常人さへ了得すると難しとせの遙か古昔に生存し而も記録に乏しき非凡の人物を了得せんとするの尙更爲し難き事ならずや、然れども尙能く之を成すを得ん、是れ常人の場合に用ふべき方法に倣

ふに在り、通常吾人が或人を熟知せんと欲するときの如何するか、吾人の可成的其人の近傍に住みて交際し其容貌、衣服、住居、日常の習慣に注意し、其人が生活の變動に於る、觀喜悲哀の時に於る、親友の傍に於る、仇敵の前に於る種々の舉動を熟察し、又其人の言語、不注意の談話、公衆の前に於る謹慎の發言を聽くべし、而して最後に吾人自身を想像上其人の境遇に置き以て其見地より事物を眺むべし、人或の斯る煩勞を厭はん、然れども若し疑はしき人の性行を熟知せんには此法の全く必要なるを了らん、而して之と同法を以て偉人の傳記をも學ぶべし、第一若し爲し得るならば其偉人の住居したる場所を訪ふべし、是れ其生涯に就き一層活動的觀念を興ふべければあり、次に其生涯の詳細を探り、其家具、衣服、習慣、談論を究め、其日記或の書翰を讀み、若し著述家ならば其著書を讀み、若し發明家ならば其發明の意匠方案を



調査すべし、而して終に吾人自身を想像上彼の時と場所とに移して彼の立脚地より望観し、而して彼を圍繞する境遇を算入して熟察すれば庶幾く其人物を正當に測定するを得ん、是れ偉人の生涯を學ぶべき唯一満足の方法あり、然れども或は此の法を斥けて、凡ての偉人の生涯を斯く充分詳細に知悉するの到底爲し得べからざる事なりと言ふ者あらん、實に然り、然れども許多の偉人の生涯を充分に學び能はずと云事實の少數の偉人の生涯を充分に學ぶを要せずとの理由に非ず、却て爲し得る限り益々之を學ぶべき理由にあらずや、又最高最大の人物を學び其品性を把握し其觀念と智慧とを我有と爲さば最早群衆凡庸の傳記の妄りに之を讀むに及ばざるべし。

扱此章を結ぶに當り傳記の研究より得べき特別の利益を述べん  
 (第一)傳記の研究の吾人の自負傲慢を癒すべし、

自負の最醜陋なるものにして自ら鏡面に立て自己の想像上の全備を自賛する人の短矮の小人に縮小せられざるを得ず、即ち其觀念淺薄にして其所爲矮小ならざるはなし、而して此自負を治療せんと欲せば偉人を熟思するに若くはなし、小人大人と並列すれば其短處著しく分明とからん、自負の侏儒巨人の傍に立たば其大小判然たらん、村夫子にしてニュートンの錯雜高遠なる數理を了解するに至らば自家得意の算法を自負せざるべし、田舎の詩人にしてセキネピア、ミルトンの宏大なる概念、神的和音を窺ひ知るに至らば嘗て人に誇り自ら喜びし舊詩稿を火中に投せざるを得ざるに至らん、故に偉人を深思熟察するときば過度に自ら高ぶるの弊を矯めて行爲、言語、觀念の自由、朴實、自然と爲るを得ん、

(第二)傳記の研究の吾人を導て人類最大の模範に則らしむ、吾人の模

倣的動物にして吾人の風習、觀念、言語、音調の如き皆悉く吾人の周圍に在る者に倣倣して之を得るなり、吾人の幼時より不知不覺の間に此倣倣を始め、小女の母に倣倣て家事を負擔し食物を調理し又婢僕を叱叱し或の之を鞭打つ如き惡風まで眞似るに至り、小童の父を眞似て箕踞して食し横臥して新聞を讀み或の今日不在杯と客を欺き飲酒喫烟の惡習をも學ぶに至る如く、吾人の到底倣倣を免る能はず、倣倣の猶ほ呼吸の如く自然且無意識に行はる、而して吾人若し傳記を研究して恰も偉人善人の面前に出るの心地せば自然に其崇高ある品性に倣倣せん、此に於て乎吾人の世界最善の友に接するを以て、奚ぞ其感覺思想及行為の方法を得ざるとあらんや、

(第三)吾人の偉人の傳記を研究して過去の蓄積したる智慧を得べし、即ち、歴史の知識を得べし。

古昔希臘王ダノウスの娘なる者に五十人の娘ありしが其中四十九人の一夜に其夫を殺したりければ死後地獄に陥り其罰として桶に水を盛るの役を命せられたり、然るに其桶の底には無數の小孔ありて水を盛れば從て漏り今に到る迄此望なき業を執りつゝありと、此古譚の吾人に取り歴史を教るとの比喻なるが如し、即ち夫の桶の學生の心にして水の歴史の知識、ダノウスの娘の歴史の教師なり、而して教師の斷へず、學生の心に事實や年月を注入しつゝあるも其心中を見るに常に空虚皆無なり、故に群衆中に歴史の知識を檢出するの甚難事にして多數の人に取ては過去の全く暗黒にして枯死せるものゝ如し、然るに上帝の此普通の大欽点を等閑に附するとなく之が治療法を備へ、簡單容易なる歴史研究法を供したり、蓋し古來偉人の廣大ある同情と強健ある能力とを具有し當代の知識を悉く併呑し、凡そ重要なる事實或の感情の一と

して偉人の之に關せざるはあし、偉人の該時代の貴重なる者を悉く包括する者にして歴史の化身と謂ふべし、故に偉人の傳記を學べば、通常の年代記に掲けたる繁雜の瑣事に迷ふとなく、偉人自身の經歷の金糸に貫かれたる眞珠の如き主要の大事件を知るを得ん、例へば希臘、羅馬の舊事を知るにプリユタークの傳記に勝るものなく、蘇格蘭の獨立戰爭の活劇を観るにワレリス及ブルウスの傳記より善き者なく、現世紀の始に於る大戰爭の最も興味あり完全せる記事のナポレオン、チルソン及ウエルリントンの傳記に若かざるに非ずや、斯の如く吾人の容易且愉快の法に據り過去の蓄積したる智慧を熟得して前代の繼承者、現代の先進者と爲るを得ん、

(第四)傳記の研究の吾人に人類の運命を教ふ、

人生塗炭の苦あり貧者富者に壓せられ弱者强者の餌とあり、吾人をし

て失望の嘆聲を發せしむると幾回ぞ然れども此失望を癒す一法の偉人の生涯を沈思熟考するに在り、此世に不幸多しと雖も此世の意味なきの世界に非ず、暗黒場裏一道の微光の點々此世を照しつゝあり、印度の釋迦、波斯のゾロアスター、支那の孔子、猶太の耶蘇、希臘のソクラテスの如き其他古今東西の聖賢の神の如き者にして世を導くの光なりき、或は其末路蹉跎の如く見ゆる者あれども尙ほ神の系統たるを失はず、故に偉人の神に於る關係の猶ほ遊星の太陽に於ることし、遊星の元太陽より出て來りし者にして太陽より光を引き之を反射して暗夜を照す如く、偉人の仁愛正義の光を輝かして苦吟する人類を慰め其の朦朧たる危険の行路を導く者あり。

## 第四章 小説

人の最も墓なき有生物として此世に來り其身の柔軟にして手足を腕むねを呻吟する肉塊に過ず、而して同類の動もすれば我を排擠し自然の秘力の四方より我を破壊せんとす、此繁忙雜踏の世界に立て如何せば能く其身を生存せしむるを得るか、斯く幾多の困難煩擾の境遇中に活動するに如何せば可あらん、幸ある哉上帝の此が準備を爲し常に其生涯を指導するの要件を斷へず探求すべき一慾望を人に賦へたり、此慾望の他人の所爲を知り他人の經驗を自己の經驗に附加せんとする抑壓すべからざる願望ありとす、而して虚象的に之を知るを欲せずして具体的に之を知んと欲し、他人の何たるを知るよりも寧ろ他人の爲す所を知らんと欲し、若し他人の運命の變轉を實體上に見るを得ざる時の之

を想像上に認めんと欲し、別語之を言へば傳説を聽んとを欲せり、又此慾望の老幼を問はず終生連續するものにして兒童の纔に談話し得るに至れば「話しせよ」と矯アヘへ、少年の「勇壯なる小説を語れ」と叫び、「何か珍談ありや」、「何事ありしや」との中年者の常に問ふ所なり。

叔此の如く事物の探求を好むとき其歴史と傳記の其慾望を滿すに足るべき筈なれども、歴史の重みに政治上の大事件を記し傳記の英雄豪傑の事を載するを以て、多數の人の之に注意すること少く、類の類を好み同氣相求むと云ふ如く、凡人の通常の事件、凡庸の人物を執り、若し之を實體に得ざれば想像に得んとす、故に歴史家の擯斥せられ小説家の歡迎せらる、

斯くあればとて人民の眞實を棄て虚偽を好む者と謂ふ可らず、畢竟小説中至緊至要あらざる事情の想像に出るものあれば、其本質たる運

動の起源進行の記事の眞實ありとす、誰か夫の最も人を感動せしむる「放蕩息子の比喻」を以て實事に非すと謂はんや、家猪を飼養し豆殻を食する如きのよし想像なりとも、愚にも迷へる青年が父の遺産を遊興に浪費し終に乞食と爲り困窮極まつて悔改の念を起し家に歸て既往の罪を父兄に謝する如きの日々吾人の見聞する所ならずや、

故に小説の人の需要を充さん爲めに創作され發達されしものにして其必要なるに恰も茶、コップ、井、其他の滋養的刺戟物の如し、而して老幼の境遇嗜好に適せん爲めに其形状を變じ其特質を異にす、吾人若し一考せば人の各段階の境遇の正しく之に適したる一種の小説を作るを知らん、講談師の如きも人心發達の時期の異なるに従ひ各其時期に適すべき談話を作りたり、

小兒の經驗に乏しく不思議界に住み其小なる眼の常に奇觀に注ぎ、何

事にも奇異の念を懷く者にして異人を見れば巨人と爲し、偶然物品を得れば鬼神の賜と爲し、犬猫、木偶杯も尙ほ靈智を有し人語を解し且談ずる者と爲し、最も錯雜したる舉動の魔術を以て爲さるゝ者と思へり、故に幼童と談話する者の須らく此特質を知り頗る簡單にして而も驚嘆すべき事件を執るべし、幼童の心には惡戯に長ずる者の豪傑に見へ、沈着の英雄の臆病者に見へ、善人の極めて善かる者にして惡人の極めて惡かる者とし、錯雜ある成行の棄て顧みず、万事魔術を以て爲し得べしと信ずると左の一話の如し、シンデレラ軍器を要するときの之を得ると常に容易なり、一たび其祖母の杖に觸れば忽ち南瓜の馬車に變し廿日鼠の馬となり蜥蜴の兵卒となり大鼠の馭者と化し皆各々沈着熟練に其務を成したりと。

然れども兒童の間もなく少年と爲り漸く社會の風情を知るに至れば最

早鬼神の怪談に耳を傾けず、其性質活潑となり悪戯を爲すの才智を發達すること驚くべし、或は雀に矢を放ち無害の猫に石を投して面白しとし、同年輩の者と共に屢々戦争角力等の危険を冒し、又常に遊戯の手段を考へて自ら喜び父母を迷惑せしむるを意とせず、此前途多望なる少年に對しての小説家の其法を變じ之れに適する少年小説を著はせり、其要素の冒險、戰鬪、悪戯にして極めて簡易の文章を用ひ、例へば一青年を豪胆ある主人公と爲し、此青年海を航して亞弗利加の海濱に破船し、野蠻ある黒人の住所に上陸して危難に遇ひ辛ふじて之を逃れ荒野に流寓す、其後忠義ある土人を率ひて深く内地に入り河馬、獅子、象、犀を獵て壯遊自得す、又謙遜にして忠義ある一僕あり、常に其側に從ひ土人に對し滑稽百出奇才を顯はして歡心を得、最も困難なる境遇に在りても常に健全愉快ありし云々、是れ少年の小説なり、少年

は左手に此小説を携へ右手に一片の菓子を握り且食ひ且讀み心氣恍惚として天下豈に此程樂しき事あらんやと叫べり。

然れども此少年時代は速に經過し間もなく青年となるに及べば、始めて鏡の功用を知り之に對し容貌を美にする觀念を起し、毛髮の寸法分方、衣服の格好に注意し談話歩行さへも紳士風に適はしめんと欲す、又彼は心情を發見し自ら詩文を作り得るを知り、未來は薔薇色を呈して無限の樂に充ち、好んで小説界に住し眼中美と樂の外復た一物なきが如く、此感情的青年の爲めには、人情的小説の在るあり、其要素は美、熱心、危難、救にして其愛好する人物を擧ぐれば、容顏美麗天女の如き令嬢あり、眉目俊秀ある青年の零落したるあり、令嬢の父は貴族にして巨万の財産を有すれども極めて残忍薄情の人なり杯此等の人物は卷中の六七分を占め、扱て突然大火又は大洪水の如き災害湧出し、彼

の青年は危険を冒して令嬢を救出し、次に仁愛深き中年の一人物出て來り其處に於て彼青年は伯爵某氏の後裔たる證據を發見して令嬢の父に告げ、父も今は大に我を折つて温和とあり、青年よ、爾は我嬢の生命を救ひたれば乞ふ彼女を妻とし幸福を全ふせられよとて局を結び、次に尙ほ一句を添へて此新夫婦が如何に楽しく偕老同穴の生涯を終へしなど言へり、蓋し人情界に於ては凡ての不幸は結婚と共に終り殘餘の生活は單調一律の幸福を久しく保つ如きを常文句とす。

然れども人の次第に感情界より移て現實の嚴肅界に入り、其心臓の鼓動漸く弱くなりて前途の薔薇色消失し、美と福との來りしも甚だ混淆錯雜の狀あり、此に於て其人若し淺學ある時の以前よりも虚弱と爲り、簡單なる快樂の彼を悦ばすに足らず現實界の物一として彼に興味を興へざるより只競馬、博奕の如き勝敗を喜ぶに至る、此病ある腦髓

を調理せん爲め小説家の感覺的小説を作れり、其材料の秘密、殺害、發覺にして大立物の罪人なり、此罪人を成るべく面白くせんとて天使の如き美人を借り來り、其髪の光り輝き眼の蒼天の如く一たび微笑せば天樂の如き玉音を聽き皮膚雪を欺く的の尤物、實に某男爵最愛の内室なるが極秘密の一罪を貯へたり、又此憫むべき罪人を助る勇壯なる一醜女あり、其夫の肥滿せる惡漢にして常に酩酊し動もすれば秘事を口外せんとす、次に男爵の一親戚の事情を探索せんとて出て來り男爵婦人を疑ひ始め、次第に惡事露顯しかゝりて興益を加へり、一方の罪の證據を得んと計れば一方の之を防禦し、双方種々の秘術を盡せし後遂に罪證發見せられ、婦人家を焼て探偵と證據物とを併せて火葬せんとせしが終に捕へられて罪狀を告白したり、即ち此家に嫁ぐ前に一回結婚せしが其夫を井中に沈めたる事、元來狂氣の血脉ありて精神錯亂

の状ありし事明白となりしかば之を癲狂病院に送りたり、次に諸人に一驚を喫せしめしめ殺されし前夫の尙ほ生存する事にて、彼の一旦井中に沈みしも再び匍び上りて某處に潜伏し居りたりとて全局の慘話を結ぶ類なり。

然れども上記の小説を好む淺學者流と異かり一層思慮深き性質の人の怪異的小説を好むの觀念消失するや更に廣大にして真正なる生活の理法之に尋で來るべし、今や彼は現實界の理想界よりも更に驚くべきものあるを知り、眞理の小説よりも奇妙なるを視察し、此驚くべき世界の諸顯象、殊に奇中の奇なる人間に興味を有するに至る、斯く現實を愛する人の需要に應せん爲め夫の小説の大家リチャードソン、フザルダング、スコット、ヂッケンス、サツカレ、ジョージエリオット等ノーベルオファマンチースの所謂「風習の小説」なるものを著はしたり。

諸種の小説の大抵之に属するものにして其他にも種類あれども以上の正種と稱すべきものなり、既に前に述べし如く人の天性小説を需要する者にして此需要の假令形狀を異にすとも生涯諸階段を経て連續するを以て此需要に應ずる書籍の生存上必要物と謂ふも可なり、此考の「如何に小説を讀んか」てふ實際問題に重要な關係ある事の容易に之を認むるを得べし、吾人の青年に向ひ毫も小説を讀む勿れと言ふの無効なるを知る、青年の想像を有し其想像を歴史或は傳記にて充分満足せしめ得ざる間の小説を讀む事を續けざるを得ず、されば小説を讀むとを禁せずして之を調整すべき實際法の唯如何に小説を用ふべきかを示し、且之を濫用せし場合に於る治療法を示すに在るのみ、是れ以下に述べんとする所あり。

第一、小説の人間の性情を學ぶ爲めに用ひざる可らず、是れ畢竟小説



の大目的なり、其取る所の實に重要な題目ならずや、是れ地上の諸題目に眞に最大のものならずや、下等の動植物及び自然の物質力も驚くべきものなるが吾人の知識を以てすれば人間の最高なる神工にして理性の高き、能力の限なき、形状運動の嘆美すべき、動作の天使の如き、悟性の神の如き、世界の美、諸動物の模範と謂ふべし、此題目の雄大なるのみならず又極めて有益あり、吾人の上帝に於る義務の外に自身に對する義務と他人に對する義務とを有すと雖も、自身と他人とを知り即ち人類の性質を知るに非ざれば自身と他人とに對する義務を盡す能はず、而して人心の秘密を最高尙に顯はしたるの聖書の類なるが此外尙は人性を描寫したる數種の書籍あり、歴史及傳記是なり、然れども歴史と傳記の主として大人物を説き、吾人が知んと欲する人物を飲く、吾人の吾人に似たる境遇に立ち同様の誘惑に遇ひ以て吾人の模範

警戒となるべき普通の人を知んと欲すると切あり、是れ眞の小説家が吾人に興へんと欲する知識なり、彼の此煩忙ある世界に類したる生活と其面白き光景變化とを示し、諸種の人物をして皆其適當の役目を演せしめ、常に外部の運動のみならず人性の内部の働作をも示すを以て、是に由り吾人の其心に起り、發して行爲となり、最要の結果に終る所の動機を察し、又不徳の如何に容易なる、徳義の如何に困難なる、私慾の滅亡に終り仁惠の報賞を得るを常とするを悟るべし、今一例としてサツカレイを擧ぐ、

サツカレイは鋭敏、譏刺的の熱情を有し、慈愛、眞實、純潔の精神を具へたる最大教育家の一人にして最眞實に人性を描寫したる者の一人なるや疑を容れず、只彼に故障を容る点は其初期の著作に於ては殊に事物の暗黒面を論ずるに過ぐと云ふに在り、然れどもこは擯斥す可ら

ざるのみならず彼が青年の教育者として最も貴重すべき資格の一あり、若齡無經驗の者は事物の明面のみを視るの傾ありて其動物的性質、燃る如き熱望、活潑なる想像は皆此方向に誘導し、阿諛、違約、貪慾、惡計等世の暗面は動もすれば之を看過せんとす。今サツカレイは無邪氣なる小兒の微笑、高潔なる婦人の敬虔、眞實なる人の才智の如き光明の側面と相對して古今の通弊ある惡習の隱伏所を描出し、ロンドン  
の外見美麗なるも其公園、市街、集會所、演劇場、玉突場等皆快樂を  
求むるに忙しき有様を示したり、又彼は他の小説家と異かりて唯數人  
の上にのみ吾人の注意を凝集せしめず、背面には重要ならざる人物を  
多く出し之を詳説するの餘暇なしと雖も特異の名稱を附して其特質を  
指示し、(勞れたる老婆の低聲口吃婦人、贅言家の滑稽氏等)而して前面  
に在る二三の人物をば一層充分に且最も著明に描出したたり、其見本と

して左に諸種の遊蕩子を示さん、

嘗て輕躁あるハリリーフオーカーある少年あり、學校に出ても愚鈍且怠惰にして語を綴る能はず又書を讀み能はざりしが、忽ち流行の風潮に搖かされて頸飾の針と衣服の扣鈕に獵犬の頭を刻し下衣の前部に遊獵の圖書を縫ひ附けて自ら喜べり、又大學校に於て教員室の戸を赤く塗りし爲め放逐せられしかば此より外國に於て教育を終へんと考へ、羽筆と共に此事を語りつゝ言へらく「少し早きか晩きかの差の心に掛るに足らず、多分余の試験に落第せしならん、余の羅旬語を頭に扭込む能はず、我母の來學期に悲嘆するあらん、余の多分外國に行き諸方を周遊して我精神を改良せん、余の巴黎に行き舞踏を習て我教育を全ふせん」と、

シヨセフ、セドレーある者あり、強壯肥滿の人にして鹿皮の長靴を穿

ち、數種の頸巾を殆んど鼻の高さまで纏ひ、赤筋のチヨッキに緑色の上衣を被り銀貨大の鋼鐵扣鈕を附たり、彼の印度事務省の役人にして病の爲め職を辞せしがウオトルローの戦争の未だ開かれざりしとき英軍と共にヘルシユームに渡り、フロツクコートに短きツボンを穿ち小き金線もて飾りし帽を戴き、傲然として敵軍早く來れかしと大言を放ちしが、愈々敵軍の近づきしを聞くや否や早くも軍服を脱し髭を剃り過分の代價を拂て馬を買ひ一鞭あて、逃出したたり、然るに其印度に歸るや其語る所一として千八百十五年の役に關せざるはなく、詳細の事まで説き及ぼし人をして自身の戰酣あるときウエルリントン公の傍に在りしと思はしめ、常にウオトルローと自身の名とを併せて誇りたり、

又放蕩されども快活あるカピテン、コスチガンなる者あり、色褪めて

摸様の微なる衣服を着し、其鼻赤く毛髪の能く乾きし草束の如く左右に垂れ、帽子を斜に被り酒氣芬々として愛蘭土の訛音を交へて女子に戯れ、己れに金を貸さんとする人に諛ひ、貴族の勿論王族にも懇意なりと誇り、言へらく余の親友あるセント公殿下のシブラルマルに在りしとき余の一夜に六百圓を勝ち得たりと、

メーシヨル、ベンデニスハの貴族に諂ふ者の恰好見本なり、彼の崇拜する偶像の貴族にして其宴會に侍し饗應の糟粕を碟めるを事とせしが、貴族の居らざるときは如何なる卑賤の人にも阿諛して饗應に與からんと欲せり、自ら曰く余は無錢にて饗應を受け、無錢にて馬に乗るを得るは是れ富豪貴顯と相知るの利益あり云々、

以上の如き人物のサツカレイの手に依り此世に描出されたる者にして現今吾人の耳目に觸るゝ事實と相似たり、サツカレイが此の如き輕薄

ある放蕩子、佞人、青年の誤導者を寫出したるの尊敬すべき人々を充分に寫出したるよりも大功を爲せし者と謂ふべし、彼の實に人の父たる役目を爲したり、父が子を社界に出すとき用心せよとて之に警戒する者の如何ある人ぞ、善人か、悪人か、無論怠惰者、放蕩家、惡漢に接近せざるを戒むるのみ、茲に一子あり交友に乏しと雖若し世に出る前にサツカレイの諸作を讀み人を誘惑すべき種類の人物を知り得るとき、豫め警戒する所あるを以て假令惡漢に出遇ふとも能く之を認知し其畏を脱るを得ん。

## 第二、善良の小説の精神を休養す、

身体の時として過勞の爲め衰弱するにあり、斯る時の田舎に行き滯留するを可とす、景色の變化、新奇の山川風物、適宜の運動の速に健康の体力を恢復すべし、之と同じく過慮鬱悶の爲め精神倦怠疲勞し甚き

に至ての幾んど狂亂せんとするにあり、此場合に於て善良なる小説が精神を休養するに猶ほ田舎の滯留が身体を回復するが可とし、此外にも醫藥あると言ふに及ばざれども小説も亦眞の醫藥にして、其興味・の力の吾人をして苦悶の思慮より脱し、斬新なる光景、變化及種々の人物に接し、以て吾人の心力感情を適度に運動せしめて健康を回復すべし、カーライルの佛國革命史を著すや前稿誤つて人に燒かれしかば心中大に錯亂せしがマリアトの小説を讀むと三週日以て其落胆を慰め安靜に復るを得て再び筆を執て之を書せしと云ふ、吾人の既に小説家の教育者なりと言ひしが今の醫者なりと言はん、看るべし小説家の心の或病を癒し鬱氣を發散し精神の調子と彈力とを回復し再び吾人を激して生活の義務に當らしむるを、例へばチャールズ、デッケンスが人類に與へし無量の幸福を看よ、吾人の茲に彼が談話をものし、新奇の

人物を描き、社會の弊風を諷刺し、詩歌的想像を妙用したる如き驚くべき力を論ずるに非ず、只彼の快活なる滑稽を指して言ふのみ、小説界の旅行者は未だ曾て斯の如く愉快なる案内者に出遇はざりき、實に最美なる動物の精氣の溢出し、爽快なる活氣の汎濫し、凡ての眞且善なるものに無限の同情を表したる者と謂ふべし、彼は絶妙の筆を以て自然界の千變万化、夏時の繁茂せる樹葉、冬の霜を布きし道、日光に眠る小村、風浪と戦ふ船を描き、或は熱鬧場裏に入りて人々の愉快遊樂に耽る様を寫す所巧妙を極めたり、又高尚慈愛の眼光を以て外見上粗野卑劣なる貧民の下に潜伏する忍耐、満足、妻子の愛、無邪氣なる家庭の樂など種々貴重すべき特質を發顯したり、

普通凡庸の事項も一たびヂッケンズの目に觸るれば燦然光彩を發する如し、彼は一畫像を稱して着色したる人の陰影にありと云ひ、ロンド

83

ンの家を「煙の粉を撒きたる如し」とし、破れし家の重き戸を「雷鳴を續發す」と云ひ、アトフル、ドッチァーの衣囊は「其所有する衣服を悉く入れ得るほど大なり」、或兵士の身丈は「或人の午後の陰影を見る如し」、トロツサイ、ヴェツクの手袋は「只拇手を容る特別室のみにて其他の手指は共に一室に在り」、ロヂァー、ライダースードは「舊き毛皮の帽の形も崩れ疥癬を生じ將に溺死せんとする犬猫の如し」と云ひ、又舊き席ムシロに就て言へらく、「此席は席たる用を爲さざるより多年間其用を他の方向に轉じ何人をも跌倒せしめたり」と、斯く瑣事に興を興へ小人にも味を附けたるを以て彼は嘲弄に過ぐと非難されしが、此風習は彼が頭腦の寵兒を愛し他人をもその如く爲さんとの希望より起れる者にして、其快活なる滑稽の破裂する周圍に人々を誘ふて最も面白き境遇に入らしめ、案外の比喩中に顯出せしむ、尙ほ數例を

擧んに、ドラの伯母の「全く鳥に似たり、敏捷急速に其身を整理する  
とカナリヤの如し」、中風のメーヨヨル、バグストツクハ「其色乾酪の如  
く其目小蝦の如し朝の回生したる巨人の如く起き朝飯も巨人の如く喫  
す」、漁夫の豚兒ハムの「股引の硬くして木の如く正く帽を被らずし  
て頂に載する様子ハ舊屋の瓦の如し」、カピテン、カットルハ「頸の周圍  
に繩の如くハンカチを捲き、シヤツの頸飾の大なる小帆の如く其帽の  
硬さハ之を一見するも頭痛を起す許なり」、燈明臺に在る老水夫ハ「其  
面風雨に曝され傷つきたる老船の尾端の如く其歌ふや暴風の吹く如  
し」、ブログなる水夫ハ「老衰して蟹の如き面を有し其衣服ハ久しく鹽  
水に浸りしより硬く粘り海藻の如き臭あり」、ビル、シキスの脚の太き  
「之に適する足械あり」、トニー、デョブリングの帽子の縁ハ「輝き渡り  
恰も蝸牛の散歩に適したる如し」、又其他の人物を寫すや其特質を捕へ

て區別せり、曰く偽善者の理想たるベツクスニツフハ「道標の如く常  
に徳義に行く道を指示すれども自身の該道に行かず」、ミツグスの自ら  
博愛の頂點に登りしと思ひ叫て曰く「望らくハ余自身と凡ての同胞と  
を嫌ひ賤むに至らんとを」と、メーポールの愚鈍なる地主シヨ、ウ  
#レットハ「炎々たる猛火の前に煖まるに非ざれば決して思想する能  
はず、其頭腦をして或觀念を起さしむる前にハ實に之を料理するを要  
す」、又ミカウパーハ貧苦窮迫の人なりしもデッケンスが一たび椽大の  
筆を揮ひ高遠の文もて其不幸を描出するときハ躍然として常に偉人の  
風を示し榮光を放てり。

吾人若しデッケンスの著作より得たる無邪氣ある快樂の無量なるを考  
へ、又之を讀みたる世界幾萬の人数を算ふるときハ人類幸福の總額を  
増加したるの夥きを驚嘆せざるを得ず、實に彼の滑稽ハ世界未曾有の

一好音にして人類の一大恩人なりと謂ふへし。

### 第三、小説の歴史を教ふ、

小説家の實に人の動機、行爲及當時の風習を記する歴史家なるが又時として過去に溯り歴史の本領に立入るとあり、吾人の説を以てすればこの正當の所爲あり、通例歴史家の一の材料の缺乏より一の想像力の不足より普通人民をして歴史に興味を感せしむるの功を奏する能ず、其記述する國土の朦朧として色彩なく生命なく、之を學ぶ者の忽ち紛々たる政治上の陰謀或の軍隊の運動中に捲込まれ、大人物の無形沈黙の幽靈の如く出入し、讀者が以て利益すべき讀者自身の如き人物に乏し、然るに歴史的小説家の此缺點を癒さんと欲して夫の朦朧たる國土の上に其想像の光を輝し、政略戦争の最も著き者を撰て之を個人的生活の物語と混じ、英雄豪傑に形と色と精神を興へ、更に之を實際の生

活に近からしめん爲め自己の想像より創作したる普通の人物を附加し、今まで陰影たるに過ぎざりし領域に現實の有様を興るものなり、例へばウォルター・スコットが蘇國の歴史に爲せし所を看よ、蘇國史のスコット以前に在てのウレエ、ブルエ及女王マリーに關する部分を除くの外未だ世に顯われず、只古代遺物の錯亂せる堆積に過ぎざりしが、スコットの天才の此遺物の中に立て枯骨を動かして生命を興へ、其小説に依り蘇國の舊史復活するを得たり、彼の舊城を再建し古代の甲冑兵器を裝ひ眞實の肉骨ある活人を顯出し、古戰場に吟行する死者の幽靈をして形体を具へて戦鬪し再び舊狀を味ひしめたり、此に於て古代の蘇人の畫像を離れて歩行し談話し活動し始めたるを以て更に其周圍に種々の想像的人物を集合して之を明白にし之に風味を興へて實景を見るが如くならしめたり、スコットの歴史的人物の描寫の極

端偏僻の批評家より不確實なりと言われしかども、眞實に近き生活を示せりとの功蹟あるの掩ふ可らず。

小説を讀むべき方法此の如しと雖も世上到る處之を濫用する者擧て算ふ可らず、彼等の其老幼男女たるに論なく其心の皆兒童たる者にして好奇心を除く外一も心意力の發達せるものなし、「小説」「珍談」とい其兒童の如き知力を慰め空しく時間を殺すの語あり、彼等も時に善良の小説を讀むとあれども其心意の薄弱なる爲め之を消化する能はず、大人物の空しく其腦中を通過して毫も感觸を興へず、影の如く來たり影の如く去れり、彼等の愛讀する小説の通例虛美的或は人情的に屬し殺害、秘密、惡計を骨子とするのみ、若し其小説虛美的ならば之を讀むの砂糖水を啜る如し、若しそれ人情的ならば硫黄と糖蜜との凝塊の如し、二者共に食慾を害し固形食物を吐出さしむるならん。

扱て如何せば痛嘆すべき有様を救ふべきか、如何して小説の讀者を減すべきか、風俗壞亂の甚き者は政府之を禁ずれども其他にも擯斥せざる可らざる者甚多し、假令書籍の是非を判別すべき標準を示すとも讀者の過半は一々判別の勞を執らざるべく、且之を判別すとも其時は既に有害の著作を讀み多少の感化を受けし後からん、而して唯一の治療法は猶ほ醫師が身体の諸病を癒す法と同じく即ち精神の一般の調子を高むるに在り、故に病人の青年なるときは腦力の健康を刺激増進するを可とす、乞ふ之を行ふ三種の方法を擧ぐ、

(一)吾人は青年の學校に在るとき其想像力を養成すべし、吾人は左の如く教師に言はんと欲す、斯く無分別に小説を讀むの弊を救ふの一に教師の手中に在り、人心を以て只智識を充たす囊と爲すの念を棄てよ、兒童は敏捷なる自動機たりとの念を捨てよ、而して兒童は想像力を有



し同輩に關する物語を知んと渴望する事を記憶し、歴史、傳記及一般の文學に依り此力を培養發達すべし、世俗の通弊の如く只姓名年月の如き皮殻を興へて満足せず宜しく仁核を撰み精神を興ふべし、小説家は全身を題目中に入れ想像上汝自身を記載しつゝある境遇中に置き、一時自ら書中の人物と爲り全篇をして可成的實際の生活の如くせらしむべし、若し能く之を爲すを得ば其成功疑あからん、

(二)然れども若し此法の成功せずして青年尙ほ無分別に小説を讀むとさし尙ほ一法の用ふべきあり、即ち其讀者を訪ひ「汝若し小説を讀むを主張するならば乞ふ汝と共に讀ん」と言ふべし、又彼を招て現世紀の屈指の小説の一部分を讀み聽すべし、但し之を讀むに乾燥無味を避け事々物々明瞭にして興味あらしむべし、而して順次に主要なる小説を取て其趣向を精密活潑に語り、主要の人物を演劇的に描出し、其

特質を顯し、要點を説明し、以て各書の長短を指示すべし、若し適宜に之を爲さし青年も標準的小説を貴重するに至り、之を貴重すれば恐らく再び元の無價値のものを悦ぶとあかるべし、誰か美麗の山頂に高吟するを避けて暗澹たる山谷に苦吟するものあらんや、一たび珍肴を味ひ復た粗菜を顧みざるべし。

(三)尙ほ一治療法あり、青年は決して時間を空費すべからず、懶惰の萬惡の發生地あり、若し懶惰ならんか心体共に病むべし、一たび此病を得るときは偏執の眼を以て萬事を視るより普通の人の冷淡無味に見ゆるのみならず終に之を厭嫌するに至る、此に於て小説界に逃れて理想上の朦朧たる人物に熱中し之に愛情を献げ、病益々増進して其結果たる不健康の感情を呈し醜行惡業に終ると少しとせず、故に吾人の凡ての青年に向ひ左の如く言はん、

乞ふ何事か爲せ、貧富に係らず有用の一職業を爲せ、可成の瞬間に廢止し得べからざる定業を求めよ、カーライル此世の労働を宏大ある手車に比し其手車に無数の把柄あり各人其一を握るべしと云へり、又言へらく、然るに或人々の懶惰にして其柄を握らざるのみならず車上に飛上りて重量を増せりと、乞ふ汝の柄を離す勿れ、此多忙の世界の苟くも人間の心情ある者の應に爲すべき事業に満てり。

## 第五章 詩歌

詩の真髓とい何ぞや、これ誠に容易ならざる疑問にしてプラトール以來有ゆる學者が解釋せんと試みしものあるが、詩の思想に存し言語に存せずとの見解に於ては皆相一致せり、されば詩の必ずしも調節を以て顯はさるゝに限らず屢々散文に於ても顯はさるべし、然れども未だ何

人も此問題に對し充分廣大明晰にして一般の承認を得べき答解を與へたるものなし、萬般の秘密を解釋して剩す所なき此時代は在て此簡單ある「詩とい何ぞや」てふ疑問の未だ解釋せられざるなり、如此人の解せんとして解し得ざりしものを此に又解せんをを試むるの極めて大胆の業に似たりと雖も、然れども吾人の茲に日常の生活より例を假りて以て詩の性質如何を説明せんを、茲に人あり通常の話柄を口より出任せに談ずる時の其聲又單調にして又通俗ありと雖、若し其光風美景を眺め或の義人烈士の逸事を聞き或の情人に對して語る時の其語調に變化を來すと如何ばかりぞ、此人や只言語のみを以て現し難き感情を有し、即ち一層興奮たる音調を以て語り、其語る所心の真底よりするが故に其聲流るゝが如く又音樂の如くあるべし是即ち眞の詩なり、詩とは自然に樂となり韻となる精神の内底の發表に外な

らば、詩人「天門」を歌ふは即ち自ら其歌ふ所の天門にあるが故なり。夫れ詩とは精神の内底の發表即ち精神の生命なり、故に社界の生命、時代の精氣あり、苟くも精神を鼓吹し擴大し活氣を起さしむるものは詩なり、若し詩を取り去らんか、演説家の熱心、勇夫の猛烈、哲學者の奮發、技藝家の専心或は仁人の熱情を取去るに等し、詩を取り去らむか人性の偉大崇高あるものを取去るなり、生命の酒精を去らば残るものは只糟粕に非ずして何ぞや、藝術工業は社會の複雑なる大器械を陳列するのみ、此に蒸氣を加へて運轉せしむるものは詩なり。詩の人生に必要なると此の如しとせば吾人の宜しく詩歌的あるとを力むべき也、詩歌を研究すべき也、或人は曰く我に詩の嗜好なし、神は我を詩歌的に造らずと。我之に告て曰く汝何を過てるの甚しき哉、神は他人と同じく汝にも魂魄を興へ給へり、抑も宇宙に直立して四足を

以て匍匐せざるは其証據あり、若し人にして魂魄あらば從て其中に或詩能なかるべからず、實に人生は俗化せらるゝともあらむ、或は日夕營々幼きより衣食の計に擾さるゝともあらむ、或は首足共に生存の必要に迫らるゝともあらむ、或は又喧々囂々大都の紅塵中徒らに煙に圍まれ無情に葬らるゝともあらむ、然れども自然の光景に對すれば必ずしも其中に詩の或分子なくむはあらず、而して此分子は善く之を煽動すれば遂に火煙を發して燃ゆべきものあり。

然れども次に大問題あり、此養生法如何、即ち如何にせば最も善く詩を學び得べき哉、通例の答を以てせば大家の詩を讀むと是れなり、吾人は万事を真似て學ぶか故に此方法の必要あるは何人も能く知る所にして又説明せらるゝと屢々なるを以て更に茲に喋々するに及ばば、故に今別に一法を示さんと欲す、こは前法と隨伴すべき方法なりと雖も

明かに指示し難くして而して未だ人の知らざるものなり。

現今出版物の廉價なるの時代吾人の書籍を信ぜると度に過たり、吾人は精神よりも文字を信じ、書中載する所の趣意を會得すれば最早他になすべきことなしと思ふか如し、而して書籍の只目錄にして、最善の書物も自然の大事實を記載したる目錄に過ぎざる事に考へ及ばず、然れども吾人の事實其者を探求し書物の助けを得て之を視察し且之を了解するを力めざる可らず、老嫗の論の如く「その印刷せられたる故に眞ならざるべからず」と云ふの未だ以て足れりとする可らず、吾人の若し能ふべくんは何物をも証明し確知し而して之を全く自家藥籠中のものとせざるべからせ。

此故に吾人の諸君に告ん若し詩の能力を養ひんと欲せば詩人の美と共に自然の美を學ぶべしと、然し物の順序より言はば先づ第一に自然の美を學ぶべし、然らざれば詩人の美を味ふ能はず、彼の詩人なるものは何の術あつて人の心を動さんとするや、他なし只物の影像と聯想とに由るのみ、而して吾人若し事物其者を知らずんば何で事物の影像と聯想とを味ふを得んや、假令ばレンニソンが五月の曉を咏する句を擧

“To left and right

The euehao find ois name toasee the hills.”

右と左に雞が小山くくに名のりけり

そも都會に育ちて點燈者の足跡より遠く出しこともなく雞とは只鳥の名とのみ覺ふる兒童には何とて此明白なる實景の胸に浮ぶことあらむや、假令へ稍々胸に浮ぶとするも只意味なき一妙句と看做さん、只鳥が小丘に止りて形の如く其名を告ぐるのみなれば此の鳥は或は孔雀と

換ふるも差支あるまじと思はん、されど一度田舎の風景を熟視せし者には此等の數語か呼起す所の妙味幾許ぞ、吾人は是に依りて都會の塵境を離れて懐かしき幽境に在るの感あり、時しも五月の日うらゝかに野景は鮮かに綠色に蔽はれ、田舎の物閑なる折々間隔てし丘上より聲かすかに雞の妙音聽へ、恰も夏の好客冬を知らず常に青藍の家屋に住る蒼々の天を戴きたる鳥か曉天漸く紅を染めし頃翼を伸して無邪氣に小山くくに名乗り合ふを知らん。

然りと雖も自然の美を見出すと固より容易の業にあらず、彼の蘇格蘭の美なりと云ふとは廣く世の認むる所、年々歳々數千の遊客眼鏡を携へ一見して口々に贊嘆するを見ても其事實なるを知るべし、されど其事實の知られざると久し、湖山は依然として今猶昔の如し、世々代々旅客來りて注視すれども敢て奇なるを見せ、遂に七十年前エデンハー

グの少年法律家ウナルター、スコットなる者出で、より其美景は發見せられ又世界に紹介せられたり、而して聞く所に據れば無學の外國人はスコット出でしよりスコットランドと名けられしと誤想する者あるに至れり、此故に自然物中何が美あるかを學び知るに全く必要の事なり、さて今一二の法則の自然物を研究するに必要なものを擧げて之を示さん、但し自然とは天地草木の謂なるのみならず又人類の謂なり、此等の法則は凡庸に似たりと雖も皆人心の組織に基きたるを以て凡て眞の詩人并に哲學者とも或の意識的に或の無意識的に此に従へり、即ち分つて二大區分とす、

第一類、天地草木に關するもの

第二類、人類に關するもの

## 第一類 天地草木に關するもの

最初に余か述べんと欲する事ハ「田舎に行かは自身を自然の樂しき勢力に没入する」に在り、されど之を爲すもの實に寥々たり、多くの入田舎の快樂を以て不興となし且つ都會の樂を齎らして以て之を殺風景にし甚しきは之を瀆し、鬱たる森林或は樂き郊野に行くことを得せず却て自然の凄壯を恐れて之か禦具を備ふるものあり、甲は釣竿を携へて河流に糸を垂るゝあれば、乙は小銃を擔ふて山靈の清閑を破るあり、一は酒肴の力を借りて以て興とし、他は煙を吐いて世俗の雜談を事とす、此等は皆都人士の癖にして煙突の見えざる清境には毫も用なきものあり、若し人にして自然より益する所あらんと欲せば即ち別法を求めざるべからば、須らく全心を注いで自然を愛すべし、炎天紅日を離れよ、

都會の煩勞娛樂を棄てよ、速に煙塵を去れよ、車或は馬車あらは之に依りて以て彼の肩摩轂擊の喧擾を去れ、彼の大道を挾むで聳ゆる瓦屋の眺望を遮る、或は荷車の走りて瓦石を粉碎する囂々を隔りて而して後に田舎の空氣に觸るれば自然は恰も生るか如く呼吸するか如し、草蔽ふ溪、木生ふ野を眺めて之に坐し、耳目を開き四顧して以て自然に同化すべし、眼を千種萬態の花卉岩石に遊はしめ、耳を溪流の潺湲、禽鳥の朗音に樂ましめ、鼻を郊野の馥郁たるに酔はしむれば、當に知るべし詩興只其内にあるとを。

是れ詩を自然に了得するの法なり、エマーソン曰く既得并に既知の力を超えて恰も又之を倍するが如く新知力を得て加ふるは自身を自然の事物に没入するに由る、又個人としての一私力の外に人類の門戸を開きて精氣の環流中に立ち以て得る所の一大公力あるを知ると是れ即ち

哲人の秘鑰ありと、實に晃々たる蒼天の下には如此詩料を備へたる學校あり、古來の詩人の皆郊外或は幽境に於て其感化を蒙りたり、ボルンス曰く

「ミューズ(詩神)否詩人は獨り陋巷に落魄する迄も自然を愛す」

ウチルツウチルスも亦詩人に付て謂へるあり曰く

「詩人の天地山谷の外觀を見て深奥の衝動力を幽冥の間に知得すと」

夫れシデア曠野のモーゼもエダヤ山中のダビデも群島砂濱のホームルもマンチユア畦畔のウイルギルもアヴチン河上のセキスピアもホルン野外のミルトンも英國湖畔のウォルツウオルスもウアット小島のテンニソンも悉く是れ心を天地の感動に遊はしめたるものなり、自然の精氣は赫灼として其光を放ち遂に詩人の五官を貫き七竅を透し果は其心情其想像を捕へたり、詩人は自然の器具となり自然の光を以て輝

かし自然の熱を以て温めたる思想を傳ふ、實に自然は母にして詩人は猶ほ愛兒の如し、詩人慰安、奮勵、及新思想を求めんとするときの則ち其母に歸る、自然の詩人に對するや終始嫣然として笑ふにあらざ、時に苛刻嚴肅なるとあり、然れども誠意自然を愛する詩人に對しては自然は常に美にして艶、嚴厲の聲中尙ほ音樂の好調を聞き得べし、愛兒其母の膝に身を寄すれば母は之を慰め之を戒め且つ之に奇談を語り又之に極めて愉快なる連想を喚起さしむ。

第二に謂はんと欲するは、自然の特美を對照して、以て活動的に描出する、とあり、若し一種の色のみ常に眼前に在りしならば毫も色の觀念あらざるべし、若し一種の音のみ常に耳に響くとき、毫も音の觀念なるべき等なし、觀念を生じ得るの唯心が一感覺より他の感覺へ移る時のみ、されば對照の作用の凡て知覺の作用に必要あるものあり、而して

知覺の作用敏あるに従ひ對照の作用亦益々敏あり、吾人知覺の敏なるを稱して常に「判斷よし」とか或は「辨別よし」とか云は即ち物の差別對照を見ることの謂あり、若し生來此作用なくんば極簡易の斷定をも爲し能はざるべし、「此机の長し」と云ふは曾て心に記憶したる影象の或短き机と對照したるものにて對照の能力の有無の即ち人に賢愚の別ある一点なり、愚者の眼には何物も同一に見へ、賢者の之に反し事物を對比し其差別を辨じ又其眞價を定むるものあり。

人若し充分に自然の美を味はんと欲せば斷へき此對照の力を用ひざる可らば、是れ恰も凡て見むと欲する所の物を明瞭ならしむる心の顯微鏡なるべし、試に美形の一樹を不恰好の岩に、綠草を汚土に、海水の深藍色を海岸に散布せる砂磧の黄色に對照せば此等の美象に就き常より一層鋭き感覺を起さん、若し神が此地に施したる妙工を窺はんと

欲せば、試に今在る所の物と其反對の側面とを比較すべし、神の此地を全く平坦に、草木を無色に、天空を暗黒ある蒸氣の天井に作らざりし如何、却て彼の凹谷凸山を造りて景色を變化し、草木に鮮色を與へ、日光の作用に依り空中の蒸氣を金銀の敷物の如く變じたるに非ざるや。

總て大詩人は此對照の術を實施せり、彼等の天性に之を爲せり、是れ天才が彼等に與ふる賜の一あり、彼等は凡て自然の美を對照するに當り、實景に非ざんば假想に於てし、以て之を高尙にせり、薔薇を以て荆棘に比し、明を以て暗に配し、田野の爽快なる空氣を以て都會の暗霧に對す、殊にセキスピアの如きの他の大技術に於ると等しく亦此術をも巧に用ひたり、アルデンの森に謫せられたる公卿の語を看よ、昔し公に宮中に侍せしもの今の配所に隨ひければ彼等をして田野の樂



を樂ましめんと欲して沙翁即ち九重雲臺の驕奢を此野景に對照し其樂を高めたり、

“Now, my co-mates and brothers in exile,  
Hath not old custom made this life more sweet  
Than that of painted pomp? Are not these woods  
More free from peril than the envious court?  
Here feel we not the penalty of Adam,  
The seasons' difference—as the icy fang  
And churlish chiding of the winters' wind,  
Which, when it bites and blows upon my body,  
Even till I shrink with cold, I smile, and say,  
This is no flattery—these are counsellors

That feelingly persuaded me what I am.  
Sweet are the uses of adversity;  
Which, like the toad, ugly and venomous,  
Wears yet precious jewel in his head;  
And this our life, exempt from public haunt,  
Finds tongues in trees, books in the running brooks,  
Sermons in stones, and good in everything.”

偕て流罪の者共よ、太古の習俗か吾生を樂ましむるの彼の殿閣の華麗に孰れぞ

鬱たる森は猜忌の宮の危ふきに孰れぞ

茲にはアダムの罪あらじ

時候の變はり氷鳴り、寒風無情に罵り吹き荒び、肌を咬み寒氣に

震へる時さへも余の尙ほ笑ひ且語れり

こは我に我の何たるを感じ易く説く所の教師にして決して諂諛に非ざ

薄命の用は好まし、蝦蟇の如く醜く毒ありとも尙ほ其頭に貴き寶玉を戴けり

浮世を離れし此生活は木々に言葉あり流る、小河に文書あり石にも説教ありて何物にも益あるを知らしむ

第三、「現在の物に就ては、以前経験したる或物に類似したるものなきや」と探究すべし」抑々自然を學ぶに當り一物を或他物に擬へ即ち比較するは屢々有益なるものなり、

盖し世界の事は夥しく多く且千差萬別なれば人心爲めに惑亂せられ易し、故に之を了解するには物の類似に依りて綱目を整へざる可らざ

故に智識の獲得とは正に同化の謂にして即ち新に得たる事を過去記憶中の類似の事實に附加することあり、人の樹木を判別するは只曾て見たる他の樹木に肖たるを以てなり、科學者の研究と雖も亦然り即ち事物を試験して其の類似点を既に腦中に分類したる事に照合するものなり、此と同じく詩を作らんとする人は彼是類似點を求めて比喻法を用ふべし、此法の詩作者に大切なる理由は、第一比喻なくして殆んど描寫し難きものも、比喻に依れば能く之を爲し得る事あればあり、假令ば無名氏の左の言を看よ、「霜降る十一月の午刻過ぎ余のセントランド山に雪降り布きて其西に向へる斜面は太陽を受けて輝けるを見たり、余の此景を見て如何に此顯象を描出せば其實景を顯すべきかと困じ果てたり、扱てふと思ひ付きし、天空を顯はすに、嚴寒に依り荒らされたる地貌の凄凉を癒さん爲め天上より銀粉を滴し其上を薄き薔薇色

に染出したるに比せば可ならん」と。第二に比喻法の功用は些細の物を明確にするとなり、此例の滑稽あるもの、次の奇談中に在り、一士あり悪戯盛りの子と興に田舎の豪家を問ひしが、やがて家を後ろに歸途に就く、折しも一匹の飼犬門關迄尾し來り子供は面白く又不思議に思ひしに、父の云ふに「ア、此の此家の巡查にして其受けたる訓令に由り汝に嫌疑を懸け汝を拘引せむとするものぞ」と。

譬喻を用ふる力の詩人の一大特權なり、詩人の思想の尋常の語を以て顯のさんとするも明晰を欠き或は意の如くあり難きを以て想像に訴へざる可らず、故に言葉を用ふるにして比喻を用ふる、叙事を執らすして畫像を執る、事の模糊として辨じ難きものを明説するに、平常親炙したる自然物を假用す、彼は造化を賜物とあしてミルトンの天使の如く岩石山岳を兵器となし、又ナルフ・サアの如く木石を活かし絲竹の聲をな

さしむ。

第四の勸告の左の如し、「凡て一景を觀るには可成的其全景を看取すべし、俗人は之を爲す能はざ、アンドリュウ、フェアセルグ、ある人の瀑布を眺めし時其周圍の境遇を見ざりき、彼の危岩に生長し鮮光を呈する菌苔野花藪林の類を看す水煙飛散彩虹陸離たる全景の粹を見ぞ、其見しもの只岩礁の泡沫のみ。

ベイリー、ニコル、チャルビーも亦此種の人なり、嘗てロモンド湖を舟行するや彼の樹木蒼鬱として碧水上に浮ぶが如く見ゆる島嶼を見ぞ、綠草斜めに生じ樹木空に懸る絶景の河岸を見ぞ、又高く天を磨ずるの峻峯を見ず、彼の只水のみを見て石炭船の往來する爲め中央に一小帶路を残して湖水を乾枯せば可あらんと思ひたり、卑俗ある動物中驢馬の如きも尙は一標本として可あり、彼の蒼明の天を仰き綠草の地

を履みながら一も其の美を看取する所なく只鼻前に動く蒔草を見るのみ、蒔は彼に取りて全世界あり。

偕て自然にして若し戯兒の妨ぐる所とならざりせば美物は決して孤立せざ、其隣接する諸物をして秩然として相集り更に其個々の美を増さしむるものなり。

“The nightingale, if she should sing by day.

When every goose is cackling, would be thought

No better a musician than the wren.

How many things by seasons, seasoned are

To their right praise and true perfection !”

ナイチンゲル(夜中に囀る鶯屬)

鶯鳥と共に晝鳴かば鶇鶇みどりどりの音にも劣るべし、かくぞ物には時節あり、時節ありてこそ正しく褒られもすれ又真に全くもあるなれ

是故に人若し自然の美を翫味せむと欲せば先づ一景毎に其全体を觀察せざるべからず、先づ著しき一物に精神を聚注すると肝要なり、如此して嘆美賞揚すべきもの多くあるを悟らむ、然れ共斯くなしたる上に又心を周邊に奔せ之に關係ある諸物を探り、全景を一幅の畫と看做し其諸部は全躰の關係を助る爲に設けられたるものと知るべし、而して其結局を見れば必ず驚くべきものあらん、劈頭第一に眼を喜はしむるものは愉快の情漸く減じ、之に反して諸物の各状態を回視すれば漸く其情を増し其樂み言ふべからず、其樂みの大なる所以の明白なる理由あり、是れ相調和したる數物を一々順を逐ふて見る時の更に愉快の念を増さしむればなり、今人の熟知する一例を擧ぐれば畜類を好む人の巷街塵芥中に立てる小羊を見て之を賞美し之を愛觀すれども、若し

綠草深き牧場に之を見るときは其樂を加ふる幾許ぞ、其周圍の萬物の或い丘陵に朝暎を映じ或い靑草萌芽し野花の點々笑を呈する如き一として美快の念を起さしめざるはあし。

斯く一景の全幅を観察する力の詩人に必須ある天才の一にして、其感化が眞正なるの一証なり、詩人の造物者と同情し、萬象中に一法を探り、一物を一物として見せに全局の一部として見る者なり、是れ其用語に於て見るを得べし、通常の記者が單語を用ゐる場合に詩人は圖畫を用ひ、他の記者が單に理性に訴ふる場合に詩人は想像に訴ふ、即ち詩人は單に物を物として讀者に示すを以て満足せき、常に相關係する凡ての事態と共に其物を排列せり、ミルトンの如き殊に然り、彼が一物を説明せんか爲に引用する比喻の如き單に説明せんと欲する物の性質を記するに止らず物の全軀と其凡ての特質とを悉く現示せり、假令

ばパンデモニウムに群る悖戾天使を蜂群に比するに、彼は雷に蜂隊に筆を限らず更に蜂窩が日受よき園の露を含みて鮮かなる草花中にあ  
る全景を寫出せり。

“As bees

In springtime when the sun with Taurus rides,  
Pour forth their populous youth about the hive  
In clusters; they among fresh dews and flowers  
Fly to and fro, or on the smoothed plank,  
The suburb of their straw-built citadel,  
New rubbed with balm, expatiate and confer  
Their state-affairs. So thick the airy crowd  
Swarmed and were straitened.”

春の日はトラス山の端に昇り、若やぎ返る蜂共が巢穴に集るさま房のごとし、露花わけてあちこちに或の滑けき板の上に、稗で建てたる城にたて籠り、更に香膏を塗り飾り、國事語らひ寄り集ひ、樂き群の數多くして居處狭し、

第五の勸告の次の如し、「自然界の美物に對して得たる聯想上に可及的充分に凝思せよ」吾輩はゼフレ、アリソン等が美の念は全く聯想に依頼すと云ふに同意すると能はざと雖も、然れども此等の美の念は大に聯想に由りて高めらるゝ事の疑を容れず、聯想の人に賦へられたる魔力の一にして是に依り屢々不快のもの變じて甚愉快のものに化し得る事あり。

聯想を惹起さしむる物の食物の美味にせよ花の香にせよ將た音色にせよ其の結果に至りては皆一にして、恰も死者の蘇生の如し、此に由りて去りて久しきもの復現はれ暗黙年を経しもの復聞かる、此に由りて壯時の愉快は其の思想感情及當時の光景と共に忽然として湧出し來り、恰も記憶の寶匣を開く金鍵の如く、恰も生命を若くする仙人膏の如し、而して一瑣事を雖も屢々此魔界を覺醒せしむるに足るとあり、無名氏曰く「余幼時の僑居を尋ねて適ま森に近く馴れたる田舎道を辿るとありしが、見る物觸るゝもの皆變らざるはなく滿目蕭條何の樂みなきに似たり、されど突然傍への樹より聞えし小鳥の一聲は端なくも全景を一變せり、是はこれ鵬の歌ふ聲にして其聲は依然三十年前の聲なり、此に於て過さし昔の樂しさ之と共に思ひ出られ、余は再び幼時の感情希望に滿され、梢の友の只看れば以前の樂しき夏の日に尙ほも面を映せる杯、數分前まで悒々たりしもの今や露の如く消へ去りて娛しさ言葉に盡し得ざりき、茲に又天工の吾生に備ふる敢て偶然なら

さるを悟らしむる一例ありき、抑も是等の粗野ある鳥の一聲と雖も其聲の同一あるは即ち我等の教訓に最要なる目的を供するものなり、是れ即ち過去と現在を連結するの小線にして吾人の心を壯健活潑ならしむる一條の感覺の舊事を想出すより起るものあり、且つ現在過去の快樂を連接するに由りて吾人の造化不易の恩恵を悟り得べしと云ふも決して過言にあらざるべし。

人若し郊外に出れば先づ此聯想の力を用ふべし、面白き物の中にても白き小屋、巍々たる樓閣、緑りの野原、風をよぐ森等の人をして必き樂しき休日を懐ひ或の幼時の喜ばしき戯れを思ひ起さしむべし、故に此等の聯想に凝思し舊狀を喚起す物を以て他に勝りし美物と考ふべし、抑々詩人が聯想の用に依りて其觀念を強くするは決して疑を容る可らざ、若し夫れ見る所聞く所のもの特に他物と關連するときは愈々

愉快の念を増すと幾許ぞ、茲に聯想の力を善く解明したる一例あり、ホルンス曾てエヂンバーグに在りし時、或日の朝博士デユガルド、ステワルトと共に笛をブラッヅンナルド山上に曳き、四顧徘徊遙かに南天を眺めて農家、小屋等が野景清幽の間に散点せるを見て、ホルンスの涙を流して云へらく「斯る景色の樂さの靜かなる空にかすかに烟り立つあやしき賤の伏屋のさまと共に起る聯想より出るなり」と、彼の直亮敬虔の人の屢々斯る貧しき住居の中より出る事を想出し胸塞りて殆んど口と言ふと能はざりき。

“From scenes like these old Scotia's grandeur springs,

That makes her loved at home, revered abroad;

Princes and lords are but the breath of kings,

An honest man's the noblest work of God.”

四方山の斯る景色ぞスコチア國の威風の基、内國を愛て外國を畏れしむる基、公伯は帝みかどの呼吸のみ、すぐなる人ぞいともかしこき神業わらある、

第六の勸告の次の如し、「自然物研究に於て須く心に銘すべきは造物主が万物中に動作しつゝある事はなり、自然の美只夫のみを以て考ふれば勢ひ必ず之に褻れ易し、此等は決して此の如くして考へらるべきにあらず、知らざる畫工の書きたる畫幅を観るよりも知れる畫工の書きたる又書きたつゝある畫は一層面白し、此と同じく世界も偶然化生したるものとするは最高智者が造りしもの且又最高智者の今も尙ほ働きつゝありと感ずるの妙境に如かず、吾人は無生物に於る恒久の變化を自然法と稱し又生物に於る變化を生命本能と云ふ、されど自然法も生命本能も單に造物者の權力を謂ふに過ぎざ、万物を動かし變ぜるの神あり、何物も未だ全きものあり、世界尙ほ未だ成らざ創造の業は今尙ほ其運行に在り、基督曰く我か父は今も働き給ひ我も働くと、此の思ひありてこそ凡ての自然物に對し高尚なる興味を興ふべきのみ、雲の空を走る小川の海に潮する草木生ひ繁りて光と空氣とを求むる百禽萬獸到る處に食物を得る如き万象中に造物者の働くを見るを得べし、若し夫れ森羅萬象造物者の手に成るとに思ひ至らば如何なる微物と雖も之を微物として忽諸に看過すべきものにあらざる也。

夫の叙事的大詩人ミルトン、ウォルツウォルス、スーパー等に最高の靈力を興へたるものは自然の諸顯象中に神の遍在を認めし感覺なり、

“There lives and works

A soul in all things, and that soul is God.

The beauties of the wilderness are His



That make so gay the solitary place  
 Where no eye sees them. And the fairer forms  
 That cultivation glories in, are His.  
 He sets the bright procession on its way,  
 And marshals all the order of the year :  
 He marks the bound which winter may not pass  
 And blunts his pointed fury ; in its case  
 Russet and rude folds up the tender germ,  
 Uninjured, with inimitable art ;  
 And ere one flowery season fades and dies,  
 Designs the blooming wonders of the next .”  
 一の靈万物中に在りて働けり、此靈は神なり。

野原の美麗も神の賜にして、彼は目にて見へざる寂しき所も斯くぞ樂しくかし給へり。

又耕作の自負する美觀も神の賜あり。

彼は其道に光り輝く行列を出し歳の秩序を整理せり。

彼は冬の越し得ざる境を定めて其嚴寒を弱めたり。

此時梅や櫻は笑を含みて芽を出しさても寒氣に侵されざるは實に摸し難き妙工なり。

一花の枯れ萎むは次の花吹く時節あるぞ不思議かれ。

天地草木に關して詩歌研究に必要なる條件は大抵如此、人若し痴鈍腐俗無精神ありせば絶えて其妙用を得ず且之を輕忽に附するとあらん、されど敏活崇高にして此美なる世界を悟らむと欲する人は宜しく以上の條目を記し並びに之を應用することを務むべし。

## 第二類 人類に關するもの

今や吾人は人性の美を採求する法則を考へんとす、或は曰ふ人情は美からず人情は只貪慾腐敗のみと、此等の人若し自身に顯はされたりとして人情を寫出するものとせば恐らく可ならん、然れども最高の人物に顯はさるゝとして之を寫出すときは不可なり、人類は實に天より造られたる地上萬物の靈長なり、此に來りたれども自ら何處より來り將た何處に去るかを知らず、彼の地上無數の分子と共に大海の一粟に等し、彼の祖先の塵芥の上、零落したる古跡の中にさまよひ、其上下周圍に沈黙すれども斷へず働く所の自然力と稱せらるゝ勢力の大組織あり、是れ強大無慈悲にして瞬間にも彼を破壊すべき器械あり、されど彼の一点の希望心情をも失はず、肉脉の快樂を棄て造化の作用を樂

み、自ら働く法則を發見しての風火水等の大自然力を驅役し自家の用に供し、我欲を超へ心を廣くし將に來らんとする同類の福利を畫策す、彼は徳義を反映して地上の光となし、死に望むでの琢磨切磋に得たる智識も事業も措て顧みず、只堅く彼天命に任せ慈悲不可見の神の手に不滅の魂魄を捧げて未知の未來に飛び去るあり。

如何にせば人性の美を發見し得るかとは抑も至難の問題にして一卷の紙數を要すべしと雖も、人性を學ぶに既に吾人が物性の研究に用ひしものと同一の法則に従ふべし、故に此場合に於ても亦左の如く言はん、人類に善あるものに向て汝の心を開き、對照以て之を明較し、比喻以て之を高崇にし、周邊の諸物と連ねて之を學び、且上帝が精神に働くことを常に心に留むべし、然れども此外簡易にして實際に適する三法則を左に示さん、

第一、諸種の偏見を除去すべし、人性として陥り易き一病は一見以て或種の人を惡むとあり、人は容貌衣服言論を以て速断し得べきものにあらざ、各人皆己れの形式と一致するものに非ざ、よし己の風采を以て最良とするも各人をして精密に己れの如くならしむるの難し、若し能く爲し得るとせば世界は單調、不快、狂妄、混沌に陥らん、吾謂ふに如此は自殺を以て終るべし、されば汝の厭嫌する人も一方には其必要あり又裝飾ともなるとあり、若し然らずとせば如此人必き此世にある筈あり、世界には最も不用微細に見ゆる人物をも尙は能く之を容るの餘地あり。

第二、何人の中にも或善益ある者なれば之を發見せんことを務むべし。天の人を造り日々人類に肉体的食品を興ふるのみならず又精神的食品を興ふる故に何人にせよ如何に惡人なりとも尙は幾分か執るべきの点

あくんは非ず、財産、羞惡、懺悔の感或は改善の欲望の類是あり、こは常に顯はれずとも尙は存するに相違なし、此故に一見以て全く癒し難き惡漢として何人をも責む可らざるは吾人の義務あり、有名なる亞米利加の作者ブレット、ハルトの名は蓋し由來する所の事實あり、そは彼か其篇中に取りたる所の材料は彼亞米利加西岸に鑛夫として群集する全世界の漂泊馬骨連にして、此等の人類中にも尙は天真の義心英風の折々隱見するとあるを示したれば也。

第三、最も肝要なる凡ての人類に同情を有すると也、先づ己を彼等の位置に置き己を彼の境遇に交へ、彼等に代りて万事を見よ、然して后若し自己が彼等と同じ境遇に成長したりとせば如何に想像し如何に懐ふかを察すべし、然る時の究竟己も亦彼と左程に軒輊する所なきを知り大に他の過ちを寛假するに至るべし、同情の凡ての詩人的美質の

最善なるものあり、詩人に假想あり想像あり美辞あれども詩人の實に活動する同情の權化なり、シエキスピア何か故に大詩人たるか、彼の種々の人類を最も充分に最も忠實に寫したるか故あり、然らば如何にして是を爲し得しか、曰く同情の無限ありしが故なり、彼の精神は區々たる自身一個の軀形に拘束せられず遍ねく遊行して人類全体と共に住み、万人の心中に入り上王侯より下庶人に至る迄凡て其徳義と其弱點とを咀嚼翫味し之を公平に且愛情もて顯示したればなり。

以上は凡て詩を學ぶの道なり、詩の宜しく自然の光に由りて讀むべし、詩を學ぶの人は他の美術を學ぶの人と同じく恒に自然に觸れざるべからず、常に書籍よりして自然に訴へざるべからず、凡て書中に在る事の少くとも自然物中に其萌芽痕跡を見出さざる可らず、實に詩中精密に自然に符合せざる所の理想上の景色性質ありと雖も此中の個々の

組成分は必ず實世界に見出さるべし、全部は理想なりとも部分は現實なると容易に自然に由りて之を證するを得べし、詩を學ぶ獨り此法あるのみ、自然を見せして書を讀む人は文字を解すべしと雖も詩の眞髓に至りて決して充分之を悟るを得ざるなり。

## 第六章 戯曲

抑も數人の相關係したる所作を語るに二法あり、一は冷然又平然として事實を説明すると恰も遠方より見るが如くし、日常の言葉を以て日常の態度を以て人の言行を語りて以て事足れりとす、一は性來模擬の能あり、單に事實を事實として語るに止らず之を現實にすることを務む、彼の己の特性事情を脱化して説明せんとする人の特性事情に轉化し、語法音聲思想を一々其人に似さしめ縷々として過かに全景を聽衆

の目前に現はさしむ、其貌を動かし聲を變じて話すを聞く時の吾人は其語れる人を全く忘却して話中の種々の人來りて說話するかと懷はしむ、是れ即ち戯曲家あり、彼の戯曲を作り且同時に之れを演じつゝあり。

戯曲の二種に分ち得べし、蓋し戯曲家は人生の悲慘の方面を見るとあり、彼の感ずるは人の運命は誠にあやしき迄に果敢なきもの、何處より來り何處に向て去るを知らず、内に燃ゆるの情は絶えず動きてやゝもすれば零落の源を爲し外に群る同類は爪牙を鳴して我の隙を窺ひ、一朝天災地變起らばあはれ彼世の旅路を辿るの悲みを免れずと、斯く觀する人の戯曲を名けて悲劇トラジエヂと云ふ、然れども戯曲家は又人生の幸福なるの方面を見るを得べし、謂へらく人生は左程闇黒のものにあらず、世界には輝ける日光あり、花あり、山水あり、若き男女は憂を外

にして笑ひ樂むは是れ皆天の賜にして吾生の爲にせられたり、何ぞ樂まざる、何ぞ笑はざる、否斯なすは吾人の特權且つ義務なりと、斯く觀する人の作れる戯曲を名づけて喜劇コメヂと云ふ。

凡そ劇の喜と悲とを問はず戯曲家は不思議の効力を致すものなり、第一の談者は只出來事を説明して休むと雖も戯曲家は然らず、俳優の助けを得て以て出來事其儘を躍出せしむ、前者はわづかに聽く人の想像をあやつり、後者は聽く人の五官を動かす、其力は實に或要用なる目的の爲に備へ分れたるものなり、左に其目的を述べんとす、

所謂戯曲なるものは只道具にして其終局は徒らに滑稽諷刺等腹を抱へて絶倒するの類に過ぎずと雖も、如此道具的の戯曲は眞の戯曲として敢て文學なる名稱の中に列するの價なし、然らば眞の戯曲且つ其目的とは何ぞや、

人あり何種の文學か人心に於て宗教と最も隔離したるやと問はゞ「戯曲」と答ふるなるべし、されど不思議なるかな戯曲の本は即ち宗教なりとは、希臘、印度、支那に於ても其基づく所は宗教の儀式にして宗教を扶掖する爲なりき、何故に斯なりしやは至て見易きなり、假りに未開の民相集りて祭典を營むとせば、儀式と共に相伴ふて執行せらるゝの方法果して何に由るや、僧侶の説法人に聞ゆる少きを以て未だ足れりとせず、聲揃へて歌ふ聖歌は聞くべしと雖も單調に過ぎたり、必ずや目に訴へ而もたやすく解しやすき者の工夫起るべし、此方法よりして戯曲的動作の起り隨て俳優の如きもの出で、聲を出さざれば必ず容態を造り、八百萬神々の逸事を演すべし、此の形式に因るもの即悲劇なり、勿論悲劇は喜劇の追隨するものにして今日に於ても謹嚴莊重の曲人氣を引けば其の次には必ず滑稽戲謔の興り來るが如し、喜劇も斯の如く

悲劇に伴ふと猶影の形に於ける如く、隨て喜劇も亦宗教的祭典にも演奏せらるゝに至れり。

然れども希臘にては年を経るに従て戯曲は宗教の儀式たるを止め、人智の漸く開明なると共に戯曲は美術となれり、悲劇作者を以て有名なエスキラス、ソポクレス、ユーリッピデスは其理想的英雄、半神半人或は諸神か偉業を起し畏怖を忍び或は危ふきに臨み勇往悔無きの様を叙せり、アリストテレスの詩學に曰へるとあり、此等の作者は皆道徳上の大目的を保ち而して其目的とする所は憐愍恐怖の術を以て聽衆の心を清むるにあり、蓋し困苦を見ては之を憐れみ究困を見ては自ら此に陥らんとを怖るればなりと。此説疑なきに非ず、元來希臘の戯曲作者は技藝家と同じく其目的とする所は只理想的美或は理想的雄大を寫すの外なし、彼等の眼中固より英雄より大なるものなし、其英雄とは

即ち逆境に陥りて困苦するにも關らず勇猛敢て屈せず、勢漸く盡き心閑かに命を天運に委する者なり、故に希臘人の其文明の盛なるに當りての戯曲の單に技術たりしなり。

中古闇黒時代に際し、戯曲は技術として考へられざるに至りし時、基督敎僧侶は戯曲を以て聖日會堂に群る無學文盲の輩に宗教を教ふるの一方便と思へり、此故に聖史中の出來事を脚本の躰に作り之を仙談或は神話と稱し以て人民教育の爲め聖敎上の人物を擬したる也、此類の興行は紀元二百年頃猶太人エゼキエルなるもの工夫し始めたり、最初の劇場の即ち會堂にして最初の俳優の即僧侶なり、然れども如斯は則ち聖敎を蔑視するの累ひあるを以て戯曲を以て教ふるは徳義上の者のみに限り、曾て徳敎劇と稱するものヘンリ第六世の御代に英國に來りしとありしが、此には例の善惡を人に擬したるもの廣く公衆の龜鑑訓戒

として興行せられたり。

凡そ宗教の儀式としても美術としても又道德宗教を教ふるとしても是皆戯曲を要したる重なる目的なれど、若し戯曲の効力を充分に發揚せむと欲せば到底以上三中の一を以て満足する能はざるは極めて觀易さの理なり、此に於てかシエキスピヤは出で、之が摸範を示し之が定義を完くしたり、曰く演劇の眞意の自然の反射鏡を捧ぐるにありと、反射鏡を捧ぐるは少數の人の前に非ずして更に國民に人性に人間全体に向てなり、何種の人を問はず即ち上王侯より下庶人に至る迄ハムレツトよりカリハンに至る迄種々の人を描出すべし、語を換へて云へば人性の完全なる知識を教ふるにあるなり、

戯曲の眞目的は大凡右に云るか如くなるは敢て一点の疑を容さず、戯曲は摸擬術なるか故に各種人類の各種の風俗行爲を摸擬す、別言すれ

ば各方面よりして人性を叙する也、尙細説する爲めに戯曲と他の人性を寫せる著作とを對照せんか、今茲に彼の人心の秘密を網羅したる聖經を叩くよりも寧ろ史籍傳記道德論或は稗史を學ぶべし、而して是類の書に於ての解剖室の一種を觀るが如く人心の動機行動を擧示平叙したれば多少精密に之を窺ふとを得べしと雖も、戯曲に在りての實際活劇を見るを以て完全なる活動的標本歷々として日常世間にあると皆目前に現はれ、啻に其外貌を見るのみならず對話にわれ獨語にわれ是に由りて其人の胸底深く徳行の基く所を窺ひ、或は主なる動機起れば他の動機と相争ひ其中の一つが他を制抑する時其結果としての因果應報を審かにし得るなり、尙ほ之を詳説すれば茲に慧敏博識の人ありとせば、此人若し戯曲とは如何なるものか、舞臺とは何かを知らずして一朝ホリンジュエツド年代記を繙き侍臣マクベスは蘇格蘭王ダンカンの寵

將なるの條を讀み、彼がダニシ人と戦ひ勝て師を旋す時路に逢ひたる三妖婦の王と稱へてマクベスを蠱惑せしと、マクベスは野心を挟み王を弑して王位を踐みしと、彼は暴王となり殘虐を恣にし後遂にダンカンの子マルコムに誅せられしとを知るを得べし、此話明瞭にして耳馴れたりと雖も讀みし人は些の感を起さざるべし、楮翌日此人劇場に入りて適まシモキスピアの作マクベス興行を見たりとせよ、彼の驚きは如何なるべきか、身は恰も昔し其場に臨みたる心地やせむ、曾て讀みたりしと皆活動して眼中に來る、光づ三妖婦は各萎れたる振りに形を摸して唇に指を加へマクベスを王と稱揚し、マクベスは寵將として英風凜々として扣へたり、又マクベス夫人は殘忍無悔の惡相を以て出たり、斯くて此人は勇士共の漸く其主人と同じ運命に従ふを見るべし、尙ほ見もて行けばマクベスが突然蹶起して野心の心を萌すを知り、其



良心と誘惑と相闘ぐの苦痛及び其妻のねぢけたる諫めをなす容態を見るべし、ダンカンを殺して手に淋漓たる鮮血滴る短刀を提げ心の狂へる様を見るべし、又彼は野心を遂げたるマックスが尙心に慄らす憂懼猜忌の念は恰も面に叢雲のかゝれるか如く臣下の罪の疑はしきものあれば容赦なく打ち亡はし危難身に纏ふて失望の極夜叉の如く戦ひ遂に背に鞍を負ふて死するを見む、劇の見物人を感せしむると如斯夫れ深し、何人と雖も平生書を讀むで微かに覺ゆるものも劇を観れば百倍の感を増すや疑なし、現今科學の教師は諸生を教ふるに只事の順序因縁を説いて以て足れりとせず必ず之を實驗に徴し之を運用に照す、今戯曲は實に人生の學術を實驗の手段を用ゐて指示するに外ならず、戯曲の目的は人性を観察するにありとすれど觀察して何の必要ありや、其必要を知らんと欲せば先づ假りに此の智識なきの人ありとせ

ば、其人の悲み果して如何ばかりぞ、よし其人諸種の學ありとするも、天文動物植物礦物地質の學に精通せりとするも、諸國の言語に通ずるとするも、風姿天使の如く思想詩人の如しとするも、人性を知るとなくば則ち木偶に等し、博識多才空しく無用に皈すべし、人間の性情を知らざれば己の行爲を適宜に用ふると難く徒らに人の笑ひを招くべし、故に天帝を知るに次いで人性を知るは最も肝要なりとす、是なくば徳なし、徳の立つ所の基礎抑も茲にあり、吾人若し己の性情を知らざれば隨て己の短處を知る能はず、短處を知らざれば則ち之を匡正すると能はず、若し隣人の性情を知らざれば隣人の徳を知る能はず、隣人の徳を知らざれば隣人を是正すると能はず、夫れ己を知れとは希臘哲學の確言なり、己を知り同胞を知れとは一步を進めたる高尚なる金言ならせや、

吾人の戯曲の眞の目的の何にあるやを既に知り得たり、さらば如何にせば之を學び得べき哉。戯曲の目的果して人性を教ふるにありとせば戯曲を讀むの即ち人性を學ばんが爲也。固より其目的たる見る所異なるに隨て此他數多あるべきや疑ひなし。戯曲家の所謂美或ハ力或ハ妙想、感情をも併せて深思すべしと雖も此と同時に最も高き目的は人性を學ぶにあるとなり、此を忘るゝ人は猶ほ畫を見るに彩色のみに目を据えて筆力を見ざるか如し。

尙ほ問ふべきあり、詳かに人情を知る爲に戯曲を讀まんと欲せば將た如何なる順序を執るべき哉、勿論演戲を見るの大効あるに如くものなし、必竟戯曲の演ずる爲に作られたる故に此を見る時は即ち實業を見る也、而して巧妙なる俳優の演ずるを觀れば人情悉く活動して眞に迫り益する所固より大なりと雖も是或ハ得難きの憂あり、故に第二の手

段は力めて自ら致すにあり、性情を了得するに左に四則を擧げむ、  
 第一、注意して戯曲を讀むべし、是れ甚だ説明を要せざる命令なりと雖も全く必要な非也、假りにシエキスピヤの脚本を見るとせば本文を見るに先だつて第一に脚史の書かれたる時日、劇場に上りし時、題目の起因並びに趣向の因りて來りし所以等を審かにして然る後に本文を見れば敢て其難句を見せ又妙味を悟り易し、然れども作者の書きし本文を解するにハ是非共其必要なるものを除くの外最初に勝手の見解を附すべからせ、又讀む時の必き聲を揚げて自然に讀むべし、是れ能く人の意を留ざる所なり、器械的に均一なる調子を以て均一なる速度を以て讀むハ自然に非也、蜂の呻く如く瓶子の口より出づる如き自然に非也、犬の吠へ月に向て嘯くが如き自然に非也、男の聲も女の聲も小兒惡漢の聲も同一聲を以てする亦大に不可なり、朗讀の想像の業な

り、讀者の先づ己の演劇場にある想ひをなし、又順次に數多の性情の異なる人物に變ざる心構なかるべからせ、自己を脱して彼等の風態、境遇、特質に轉化せざるべからせ、全力を傾けざるべからせ、必竟彼等銘々の聲調に擬せざるべからず、此朗讀法を或人は芝居的として譏刺するものありと雖も其實芝居的なるを以て自然となる、自然なるが故に可なり、是れ一は聽人に數人會談の如く思はしむるのみならず、一は目のあたり見る心地せしむ、通常の談話に在ても巧者なる談話家は調聲を一轉して其言語に新意義を添ふ、此と同しく巧みなる讀者の自然に抑揚以て其音を變じ、一人の言語より他の一人の言語に移り、因りて以て實境に在るの懷わらしむ、又奇なりと謂ふべし、例を擧ぐればマクドフ夫人と其息子との對話の如し、此れ不要に肖たりと雖も正しく讀む時の其無邪氣の小兒の樂しき家庭の様なるに心なしの

マクドフ夫人が之を擾せし狀必ずしも活現せずんばならず、

マクドフ夫人 そなたの御父様が死去たらそなたは何する何して

暮しますか

息子 鳥の様に暮します

夫人 何と、蟲けら食べてか

息子 イエ私の獲た物で 鳥もそうでしょう

夫人 可愛相な鳥だね、汝は網や黏網や穿が怖くないかえ

息子 イエ御母さんそれはいけません鳥は穿などに罹りません、

御母様そう言ふても御父さん死去りませんよ

夫人 サ、御父さん死去たよ汝御父さんを何するの

息子 では御母さんは御聲さまを何するの

夫人 イエ市に出れば二十位買て來られます

息子 シヤ又其を賣ますかえ

夫人 汝頓智のいゝ事を云ふね余り頓智過ぎるよ

息子 御母さん、御父さんの謀叛人かえ

夫人 ア、そうだよ

息子 反謀人とは何でしよう

夫人 エ、偽をつくものゝ事だよ

息子 では謀叛人は皆偽を言ひますか

夫人 偽を言ふものは皆謀叛人だから必と首絞られるよ

息子 偽を言ふものは皆絞られなければならぬのでしようか

夫人 皆んな

息子 誰が縊るでしよう

夫人 正直な人が

息子 では偽を言ふ奴は可愛いね何故と云へば偽を言ふ方が正直

なもの打たり縊たりするから

夫人 はんどに神さまが付いて御出でなさるだらう此可愛相な猿

には、が汝は御父さんを何しやうと思ふえ

息子 若し御父さまが死去たら御母様は泣でしよう夫で泣なけり

や私は直ぐ新しい御父さま貰ふ証據です

第二、戯曲の人物を知らんと欲せば先づ其脚色を學ばざるべからず、脚色とは其名の示すか如く作家が數多の性質を發現せしむるの準備を云ふ、されば脚色愈々雄大なれば現出する性質も亦愈々雄大なり、是故にシエキスビヤは二篇を除くの外脚色を悉く宮廷、皇子、權門等、凡そ人情の最も強き動機たる野心、憎惡、憎愛の活動するもの、其他人品の何たるを問はざ此の動機の強きものを選択せり、實に脚色は性質の

發育に伴へる珍事境遇に關係するものなり、性質を解する爲には之を發育したる境遇を察せざるべからず、故に全曲を讀了せば更に始めに販りて脚色如何を考ふべし、吾人は性質の組成分たる事變の連鎖を尋ね、如何に連鎖の自然に其前に起り來りしやを知るべし、尙ほ充分にすれば之を其順序に隨て紙に書列かきつらねるも必要なり、如此すれば凡ての事實を瞭然胸中に疊み、或特殊の性質は或特殊の作爲あることを知り得むか、例令ばマッベス夫人を擧ぐ、其脚色を冥想すれば眠氣の催す舞臺の吾人をして只糢糊として畏怖の念を起さしむに過ぎず、然るに弑逆の大惡婦を憶へば此幕の恐ろしき意味を含むと如何、是れ罰の因て來る罪惡なり、恰も妖怪變化の常に彼女に憑倚して亡しがたきが如し、罪の記標は彼女の腦髓に印せられ、彼女は之を滅棄すること能はず、五臓は眠れども心は常に惡逆に煩ひ、終始王を殺したる畏ろしき

夜の業を反復しつゝある也、合圖の鐘の音、物凄き空模様、斃れたる王の態、夫の恐怖戸を叩く音、彼女が急ぎ居室に引込む所

マッベス夫人 出よう刑場だから出よう、一ツ二ツ丁度今頃爲たのだね、地獄は暗いね 我君よ我君よあれ兵共いんのこ怯れたと見える、私達が話しさへせなければ誰が知ろうと怖くはない、が彼んな老人としやうに彼れ丈數多血たんどがあらうとは何して思はれう、

醫師 覺えて居ますか

夫人 ファイッ殿は奥方を持って居たが奥方今何れに居ませう、此の手は清くならないかね最早なりませぬ 我君様皆貴方はだめにしました

醫師 御話しなさい御話しなさい何も那方は御存じで御座りませ

う

侍女 奥様は話されない事を話しますが奥様の御存じの事は神様も御存じだと思ひます

夫人 未だ血の香ひが残りてゐるアラビヤの香も是の手より香ばしくはゐるまいア、

醫師 何した溜息だろ胸が痛むと見える

侍女 彼んなに私の胸も痛まなければよいがからだが一体が品よくて

醫師 左様々々

侍女 祈禱を致しましょうよ、ね、あなた

醫師 此の病氣己の腕に六ヶしい、が眠りながら歩行いて居て開かに死んだものもある

夫人 手を潔めて寐巻を御着なさいそんなに青さめて居さい様に

最一度話すかバンクオーの埋めたによりてつかあ墓穴から出ると  
の出来かい

醫師 左様ですか

夫人 寐ましよう、誰か戸を叩く様だ、御這りなさい、イヤ

した様にもあり爲ない様でもあるマ、マ寝ましよう

第三は、一ツの性質を其而已學ぶとなり、さらは如何にして學ぶか、曰く只通常の方法に由りてなり、如何にして日常の人性を學び得るか、吾人若し心を用ゐて試みに自ら其人の位置に置き、其人の感情になり、其人の心となりて物を觀すれば能く其人の長短を判し得て餘あるなり、而して此法と同じく吾人登場人員の一を學ばんとする時は、先づ自分を其人の心となし、其人の境遇に立たしめ、彼に代りて考へ感じ話すべし、又吾人は單に感情的のみに止らずして實際上をも考へ

其人の性質の内容を計算する爲に其人の善惡共に探求せざる可らず、尙ほ此處に一策あり、それは實際的あれば即ち効果多きとなり、其心は人の前生を考ふると、或は現今の境遇を生みし過去の事情を考ふるとなり、此の法に由れば如何に其人の種々なる性質の胎胎し覆育して以て今に至れるかを審にするを得べし、シエキスピアの作には人の前生が或は明かに或は幽かに示されたり、假令ばシヤイロツクゼアントニチに物言ふ時語々皆針あり殘暴不道の扱ひ遂に彼をして斯くならしめしを示す、

シヤイロツク「アントニチ殿憶へば過ぎし昔しリヤルトで私の錢や年貢を取り上げて何でも堪忍が大切だと思へばこそ泣て堪へたれ、その時那方は私のとを不信神者だ犬だと私の半纏に唾を吐いたもなされた、其の那方か私に助けて呉れ

ると仰やるそうを」シヤイロツクや金が入用だと仰やります、那方は私の髭に糞をひりかけたり、私を蹴たり、犬を喉かけたりして金か欲しい、私はマア何と申し上げました、犬は錢を有ちますか、狗が三千兩御用達得ましたようか、奴の持前でへい〜と頭を下げましたようか

第四は 種々の性質を査察せざる可らず、書物上の學問は益なし、但し歴史小説を除けば書籍は只現世界に存し或は存すべしと想像せられし事物の目錄たるに過ぎず、よし又此等の目錄を知り得んことを欲すとも吾人は只其目錄を見るのみにて満足すべからず、假りに植物書を學ぶとせよ、吾人は只植物の説明のみを以て足れりとせず必ずや森に往き野に出で、植物其物に問ふべし、此と同じく戯曲の人性を知らんと欲せば其性質を査察せざるべからざるなり、先づ問を設けて如此品性

は眞なるや。如此人物は實際此世に見しとある哉、戯曲果して人生を叙するものならば右等の答は必ず然りと云ふの外なけむ。勿論一分一釐の差なき程のものはなかるべし、何となれば大作者は其性質を高くし或は之を理想的にすればなり、然れども其重なるものは必ず存せざるべからず、假令ば眼を開ひて見れば數多のシエキスピヤのものせし人物十九世紀の衣服にて蘇格蘭の調子にても尙ほ飛動するを見る、故に或は今日に於ても尙ほ吾人の近傍にあるなり、其の特長の點も事情も左程著しきものなしと雖も大抵は昔しと同一なり、最高の人ばハムレット最低の人はカリバンに於るが如し、吾人はハムレットが變動し易く又活潑なる性質にして能く考へ能く談じ又能く工夫するの人のして而も必要の切迫するに非れば事を處斷し能はざるを知る、之に反してカリバンは大都の下層に屬し半ば人にして半ば獸の肉躰の欲を求む

るのみなるを悟り得るなり、吾人は尙ほ一步を進めて戯曲の科學的研究を論せん、植物學、地質學、化學等には皆入門教科書と稱するものあり、學生若し日常の觀察上疑はしきものあらば即ち此教科書類を讀む、人性の學問に在ても亦此教科用書あり、學生若し或種の人の實生活を觀て尙ほ之を審かにせんと欲せば則ち此教科書に謀るべし、詳かに説明せられたる此種の教科書は即ちシエキスピヤ是なり、例を引きて之を下に示さむ、シエキスピヤの作に就ては議論千百にして足らずと雖も然れども其崇高なる性情を描ける力の強きとは諸家の同じく首肯する所なり、次の如き人品性情の摸型あり、慷慨自ら難に投するのマルカス、ブルタスや、勇敢能く戦ふと雖も遂に野心に敗れたるマクベスや、氣品清高なりと雖も嫉妬に身を亡せしマセロあり、熱情暴虐遂に狂氣となりしレ



イヤ王あり、復讐の念熾んにして遂に情に過られしシヤイロツクあり、暗愚の王シヨン、驕兒怒り易く人を責むる酷にして多涙多恨身の不幸を悲むリチャード第二世、頓才機敏なるベテック、居る所として善からざるのなき實際的哲學者、左遷の侯爵、將又完全ある王ヘンリー第五世の如きあり、

神に付ての論聞かば心竅かにはめた、え、王の高僧たるを望むらむ、政治の論聞く時の其學問のいと全きを賞たへん、戰話しを聞く時のいとをそろしき戰爭も音樂とこそ思ふらめ、

又基督教哲學者の畫像たるプロスペロの慈悲仁愛の心萬物に深く世の中を浮世の夢として未來永劫を實とするの類あり

雲突く塔も玉を彫る宮の敷居もいかめしき寺も世界もうたかたの泡か現か夢の世を眠の中にあはれなる我身一つを過すなりけり、

シエキスピヤは能く偉大の人物を吾人に示すと如此と雖も又能く日常細民の状も寫して漏すなし、

世には又一種の人あり、無學文盲にして殊に己の短とする所、友の長とする所を知らず、其成る果は銘々自己の我を張りて人の權限を彼是するに至る、先づ議論は何議論にあれ神學にもあれ植物學にもあれ教育論にもあれ彼等の自ら飛んで説教壇上に登り禿たる頭、革の如き肺を以て主座を占むるあり、今之をシエキスピヤに謀れば直ちに此種の人物を淺慮にして自惚強き高聲の痴人なる織工ポットムに於て見るを得べし、

ポットム 第一クインズ殿行らうとする狂言の何です先づ俳優の名前から讀みなさい夫から面白くなるのじや

クインズ 宜しい此狂言のな、ピラモスとシスピの酷い情死で大

變悲しい喜戯かのじや

ボット 夫は善い幕だ定めし面白いだろ、ではクインス役割を讀んだがよかる

クインス 御前から呼ぶから返事せよ

織工 ボットム

ボットム ハイ何役を勤めるのか 夫を

クインス ボットム手前はピラモスに決て居る

ボットム ピラモスとは何じや戀人か暴王か

クイン 戀の爲にいさぎよき最後を遂げる色男じや

ボット 夫奴若し己か眞面目にやつたら少し涙を出さなければならむだろ そうすると又見物人も涙を出そう 己か少し暴廻て又幾らか愁嘆するのだな、玄かし己の旨い所は暴王じ

や己はあのエルクレスが猫を裂いて皆を吹き出させる所をやり度い

峨々たる、巖は、角すれて、獄屋の門を摧かむ、地獄の火車の遙かなる向ひにひかり、をろかある此世の命亡さむ

此は實に氣高い 其外の役者の名前は、

此こそ暴王の血脉じやく情夫はまだ悲しそうじやな

クインス 管直しフリユートよ

フリユート 茲じや

クインス 御前は シスビを勤める

フリユ シスビとは何武者修行か

クイン イヤピラモスの惚れてる娘のとよ

フリユ 私や女は御免じや髭があるから

クイン 夫は誰も同じにあるに由りて鬚を冠り聲を如何にも小さくしてやれ

ポットム じや己が顔を隠して又シスビを勤めよう己が小さい聲で

シスチ、シスチ、呼ビラモス可愛の人さん、  
「御嬢さん」と云はう

クイン ス イエ、御前は矢張りイビラモス、フリユートはシスビじや

ポットム よし夫から

クイン 仕立屋スタルベリングよ  
スタルベ 茲に

クイン 御前はシスビの母親で 鑄物師スヌートよ

ズヌト 茲に

クイン ス 御前がピラモスの親父で 己がシスビの親父 スヌツ

グが獅子を勤める是れで大抵狂言は決りそなた

ズヌツグ 獅子の詞書せうふが書き付けてあれバ、用意をする間もない  
が一寸見せて貰い度い

クイン 用意も何も只吼る丈の事じや

ポットム 己に獅子を行やせて貰い度い皆なが望み通たに吼はえよう殿様  
が最も一度吼るくと云ふ様に吼るから

クイン ス 御前の余り恐ろしい聲じや夫での令嬢やお姫様ハキ  
「く」云ふて駆け出して仕舞いに己等迄無むだとなる

皆々 己等迄無駄にする

ポットム 皆の者令嬢や姫が驚いて逃たとして別に己達の事を無駄

にする譯もあるまい。では已は聲を低くしてをとなしく鳩の様に吼やう鶯の囀る様に吼やう。

クインス 御前はピラモスを勤めるの外勤め様かない何故と云に  
ピラモスは好男子で誰も見惚れる様な旦那だらうだから御前は是非ピラモスを勤める

尙此外例を擧ぐれば一々枚擧するに違わらずと雖も大抵シエキスピアの作を見れば普通の人情に關し智識を得ると莫大なりと謂て可なり、

## 第七章 演説

吾人の自由の民あり、吾人の自身を支配し、或は吾人の支配者に對して吾人を支配すべき方法を語る者あり、是が爲めに吾人の議會に集りて國政に關する諸問題を討議し多數の意見を証明するとあり、此以吾

人の公衆に對する談論即ち演説の必要を感じ之を一技術として學修し且實用するに至り、或は討論會を設けて「蘇格蘭の女王マリトの其夫を殺せし罪ありや」、「シロムウエルがチャールズ一世を斷頭臺に登らせし是非如何」など種々の問題に就き辨舌を戦はす者あり、或は未來の政治家を氣取り國會議院に模擬し講堂に立て堂々氣焰を吐き以て演説術を修練する者あり、封建尙武の時代には武士が國に盡す法の戦と死との二途に出でざりしが、現今の愛國者の主として公衆に訴へざるを得ざるに至りしも亦文明進歩の方法と謂はんか、故に吾人のカーライルの如く(彼の演説を風及舌と呼びたり)公開演説を擯斥せざ之を必要と認め且之を盛ならしめんとを望まざる可らざ、此に於て第一に吾人の決定すべき要件の演説の眞偽を區別し眞の雄辨と空言とを區別するに在り、別語之を言へば誰をか偽演説家とし誰をか眞演説家とすと

問ふあり、

偽演説家との何ぞ、今之を三種に分て論述すべし、

第一種の空談家にして即ち只喧噪するのみにて其實何事をも語らざる人なり、宴會及諸集會の席上に於て或狡猾者の出席者の一人若くは數人に演説を強ひて之を惱まし自身も亦之を聴くの不幸に陥ると甚少ならずと雖も、只憫然なる犠牲は演説を強ひられたる無口訥辨の人にして、又嫌惡すべきは人の勸告も待たずに起立して自身の愚を顯はす所の空談家なりとす、此空談家は靜坐する間は多少の觀念を頭腦に貯へ居れども其起立するや否や其觀念脱失し其何處に去るを知らずと雖其頭腦既に空虚となり、「不意に立ちましたから」、「此事を説くは外に其人あれども」など説くを常文句とす、又故意に眼鏡を左右に動し或は手を衣囊に入れ肩を怒らし百方人の注意を惹んとすれども、奈何せん

皆無益徒勞に屬し聽衆は一刻も早く聽聞の苦痛を免れんと欲し、終には之を忍び難く拍手の妨害中に葬らんとするとあり、然るに之を喝采の拍手と誤解し自ら聽衆を感動し得たりと喜ぶ者あり、カライルの文集中に左の如く言へり、「彼は水中に投入せられし驢馬の如し、若し其頭を前にして水中に入れば彼は先づ水に溺れんとを驚きしも、漸くにして自ら泳ぎ浮び得るを知るべし、但し之に缺く可らざる要件は大胆即ち鐵面皮なりとす、扱吾人の驢馬は自身を水中に托し四肢を動かせば沈溺せずして浮泳し傍觀者の賞讃を博すべし、而して無事に彼岸に上陸すれば身震して自己の能力を驚嘆し雀躍して其長耳を動せり」と、

第二種の偽演説家は「鳴る銅、響く鉦」の如く空過の音聲 *vox et proce-*  
*ra nihil* の如く哭泣し咆哮し大言するの人なり、彼の少量の意義を貯

へたれど之に注意すると少く、事實よりも寧ろ風采に、意味よりも寧ろ音聲に留意し、理會力に訴へずして耳目に訴へんとし、無味の長舌贅辨を振ひ只散漫したる音響を發する鈴鐘の類なるのみ、然るに此惡演説は固より不自然なりと雖往々驚くべき結果を得ると恰も古來遺傳の魔法の如きものあり、第一、此法は演説者自身に著しき効果を有し之に不屈不撓の能辨を興ふ、彼の説く所は無益の言にして凡又凡、俗又俗を重ねるに過ぎずと雖も聽衆の耳朵に滔々として音樂の如き響きを送り、少くも演説者の一缺點たる躊躇の風を避るを得べし、例せばチャッドバンドハ嘗てロンドンの破落漢ジョーに對する有名なる演説に於て、其心を刺激するに足るの一觀念さへあらざりしが自身の聲音に酩酊し恙なく局を結びたる其句に曰く、若年なる我友よ、汝は何の爲めに此に在るか、汝は野獸なるか、否、空を飛ぶ鳥なるか、否、河海

の魚か、否、若年なる我友よ、汝は人間の子なり、人間の子なり、嗚呼人間の子たる榮光あり」と。  
次に此種の能辨は又聽衆に種々の大効果を興ふ、或場合に於ては別段新觀念を興へずと雖も理會力を静めて宇宙の万物は秩序正しく一も心を惱ますの要なしと云ふ如く心の煩悶を去て愉快を感せしむることあり、テニソンの「北方の農夫」に言へらく、彼は其妻の死する前常にパルソン會堂に行き頭上に蒼蠅の躁々か如くなる自身の心を尋ねんとせしが毫も了解する所なかりき、されど何事も私意を以て曲ぐ可らずと感動を受けて去れりと、又或場合に於ては魔睡劑の如く人を眠むらす功あり、或蘇格蘭人、傍人に向ひ牧師某を知るやと問ひしに、然り四年間同會堂に坐睡したりと答へたり、但し稀に此種の能辨も眞に人を感動せしむるが如き事なきに非ず、ホワイトフールドがエヂンボ

ルグに於て説教せしとき一老婦之を聴き殆んど一言も發し得ざる程感嘆して歸れり、其友「汝が彼を好む所以如何」と問ひしに、老婦は「嗚呼余の其感情を言ひ難し」と答へたり、其題の何ぞ、嗚呼余の之を語る能はざり、何事を説きしや、嗚呼余の之を記憶せざり、然らば何を以て汝の彼を好むか、嗚呼夫の幸なるメソポタミアてふ一語の發音の實に優美なりしに由ると、是れ老婦の答なりき。

第三條の偽演説家の特別の辯解者、一黨派の代言人、臨機應變の詭辯家にして其最好例は古希臘の詭辯家なりとす、彼等は自ら眞理に忠實ならざるを許し、眞理は人の需要に應ずる爲めに變化せざる可らずとの説を持し、加之演説は眞理と縁を斷たざる可らずと言ふに至れり、然れども今日も亦此種類の人甚だ乏しからず、されど吾人は法廷に於る特別の辯護士、代言人の如きを此種類中に加ふるを欲せず、蓋し彼

等は必要の職務に従事し、自ら辯解し能はざる者の爲めに辯解し、其所説たる自己の意志に非ずして被告の意志を述ぶるに在るや明白なればなり、然れども政治、宗教、及社會上の代言人は屢々之と異にして自己の確信に出でずとも遺傳、教育、若くは境遇の關係より特種の意見を辨護するに至る者あり、幸に其説全く眞正(多くの然らざり)あらば其人の最幸福ある眞理の辯護者ありと雖も、若し其説眞偽相半するときは其人の萬人中最不幸なる者と謂ふべし、彼の汎く宇宙を探り前後を通觀して正路を撰定する自由の人の如くならせして、恰も夫の挽磨馬が只前方に一の狹路のみを見て歩行し外觀上進歩する如きも其實常に同一の線路を周廻しつゝあるに似たり、此の如き人の自身の進路のみを墨守し其執る武器の不正不義なるに拘はらざり、目的を達するに手段の是非を問ふに及ばざるとし、若し歴史の事實に反對すとも毫も愧色なく

自説を同執し、或は牽強附會の説明を附して歴史の真意の却て一般の説に反すと大言し、若し道理に窮するときは或權威の下に遁れ、若し其説明を求めらるゝときは佞辯を以て解明し、或は狡猾なる語句を設て其意を曖昧にし一見真理を含む大格言の如くならしめ、其術愈々出で愈々巧妙に味方を喜ばし敵を惱まし國民の迷信僻見を欺き大に激發せしむるに至るとあり、要するに其所爲たる全く衆人の眼を明にせんと欲するに非ざして之を眩さんと欲せり、是れ所謂「目に塵を擲つ」もの、若しも之を以て演説の眞目的なりとせば吾人の米國の一記者か「一國の禍因の雄辯家あり」と言ひしに同意せざるを得ざるあり。

以上の諸種の偽演説家を擧げしものなるが抑も眞の演説家といふ如何なる者ぞ、自身の誠心より出る言説を以て公衆を勵し高尚なる行爲を遂げしむる者はなり、彼が爲す所の効果は奇蹟の如し、彼は單獨の身を

以て無知迷信なる群衆の而も敵意を挾む者に對し、聲音の外一物を携へずして沸騰せる群衆を變じ自己の意志に従はしめざる可らず、而して彼が之を爲すは如何に容易なるぞ、彼の純潔なる熱情は簡單にして熱火の如き言詞を以て發動し、聽者の心底に突入して理會力に訴へ、遂に彼等をして漸々自己と同精神を懐かしめ、實に彼等を鎔解して自己の精神に依りて活動する一大体に化せしむ、即ち彼は自体を數千倍に擴大して何時にても真理の戦に臨まんとする一、大連合軍隊を作るものなり。

演説家に要する特別の資格は古代に在てはアリストツトル、シセロ、及クインチリアンに依て、又今代に在てはカムペル、ホヴエトリイ及スパルディングに依りて充分に解剖せられたり、殊にアリストツトルは甚精密に演説者の述べべき題目、其訴ふべき人の種類、其刺激すべ



き動機、其證明すべき議論、解明に用ふる比喩、其用語の種類を掲げたり、此精美なる区分は以て理論を完成する目的に供すべしと雖も實際の目的には無用なりと謂ふべし。

修辭家の諸規則は全く其器具の名を擧るに過ぎざり

“For all a rhetorician's rules

Teach nothing but to name his tools.”

演説家の演説を爲す前夜に悉く諸規則を記憶する能はず、假令之れを記憶し得るとも其努力は空しく心を攪乱して修辭的成功の眞基礎たる「本題に全心を凝集する事」を妨ぐべし、而して一般の規則として注目すべきものは只少許あるのみ、

此一般の規則中或個條、例へば演説者は本題に習熟せざる可らず、演説を始むるに先だち明白に之を整理せざる可らず、聴衆の性質に應じ

たる文体語調を用ふべし、其言語は明晰流暢音樂的なるべし、其容態は質素にして氣取らず又聴衆の注意を外に轉せしむる如き乱れたる風采を爲す可らず等は人の能く知る所なり、然れども此外尙は普く知られざる資格あり、是れ凡て眞の演説家の特質にして偽演説家と區別せらるゝも此が爲めなり、今其各項を順次に掲げん、

(一)眞の演説家の一使命——即ち自から宣傳せざる可らざる或大眞理——を有せざる可らざる、彼の教導者と爲り指南し命令せざる可らざる、故に高尚なる立脚地を占め汎く人生を探求し諸人の行路を明察し、實に高處に在て確然たる光を航海者に輝す燈明臺と爲らざる可らざる、若し此高位地を占めざらんか、彼の只動搖不定の炬火の如く寧ろ早く消滅すること公衆の爲めなり、或怠惰者嘗て其友に向ひ將に傳道者たらんと欲すと言ひければ、其理由如何と問ひしに「福音を説て神に榮光

き動機、其證明すべき議論、解明に用ふる比喩、其用語の種類を掲げたり、此精美なる区分は以て理論を完成する目的に供すべしと雖も實際の目的には無用なりと謂ふべし。

修辭家の諸規則は全く其器具の名を擧るに過ぎざり

“For all a rhetorician's rules

Teach nothing but to name his tools.”

演説家の演説を爲す前夜に悉く諸規則を記憶する能はず、假令之れを記憶し得るとも其勞力は空しく心を攪乱して修辭的成功の眞基礎たる「本題に全心を凝集する事」を妨ぐべし、而して一般の規則として注目すべきものは只少許あるのみ、

此一般の規則中或個條、例へば演説者は本題に習熟せざる可らず、演説を始むるに先だち明白に之を整理せざる可らず、聴衆の性質に應じ

たる文体語調を用ふべし、其言語は明晰流暢音樂的なるべし、其容態は質素にして氣取らず又聴衆の注意を外に轉せしむる如き乱れたる風采を爲す可らず等は人の能く知る所なり、然れども此外尙ほ普く知られざる資格あり、是れ凡て眞の演説家の特質にして偽演説家と區別せらるゝも此が爲めなり、今其各項を順次に掲げん、

(一)眞の演説家の一使命——即ち自から宣傳せざる可らざる或大眞理——を有せざる可らざる、彼の教導者と爲り指南し命令せざる可らざる、

故に高尚なる立脚地を占め汎く人生を探求し諸人の行路を明察し、實に高處に在て確然たる光を航海者に輝す燈明臺と爲らざる可らざる、若し此高位地を占めざらんか、彼の只動搖不定の炬火の如く寧ろ早く消滅することを公衆の爲めなり、或怠惰者嘗て其友に向ひ將に傳道者たらんと欲すと言ひければ、其理由如何と問ひしに「福音を説て神に榮光

を歸せん爲めあり」と答へければ其友曰く「我親友よ汝の舌を動かさ  
 いるこそ最も善く神に榮を歸するならん」と告げたり。

舊約時代に於て猶太の預言者の將に立て公衆に演説せんとするに當  
 り、先づ寂寥たる山野の洞穴等に潜居し徐に宇宙の大運動を凝視し、  
 人類の歴史を沈思し、天然の法則、自然の攝理を熟察し以て靈妙の感  
 化を受け自ら神の使命に充ちたるを感得し、而後都邑に歸り喇叭の響  
 く如く其使命を國民に傳へたり、イザヤの如き崇高なる熱心に充滿し  
 自ら宇宙と語り天地をしてエホバの詞に耳を傾けしめんとしたり、之  
 と同じく眞正の演説家たらんと熱望する者の自然と歴史と社會とに於  
 る上帝の道を學び、深く其心に入り以て宇宙の支配せらるゝ大法則を  
 或程度まで了解し、而後明白ある言詞を以て眞理を説くべし、其説く  
 所の題目の決して眞理を脱す可らざる事實——眞誠明瞭の事實の則ち

演説の本質あり、演説の感動のホウエートリに據れば以て刀劍の刃  
 に比すべしと雖も刀劍の背——即ち堅實重量を與るもの——の事實を  
 るを知るべし。

演説者が此永遠の大眞理を宣傳するときの強大なる効果を生ぜざるの  
 なし、假令高僧より按手禮を受けども只文學或は科學の教師たるに  
 過ぎざるも尙ほ彼の實に説教家たるなり、彼の自己の使命を語ら  
 ざして神の命を傳ふ、彼の宇宙の重量否神靈の後援を感ぜるが故に其  
 語るや權威の聲を以てす、其容貌の輝き、眼光の閃き、音聲の震へ、  
 容体の威風あるの即ち神靈の感化を証する者なり、此時に當り其演説  
 の明白強健にして千仞の岩嶮より迷下する河流の如く、時に嶮岩を突  
 下して障礙物を除き、又時に滔々平野を流れて壯大の觀を呈すれども、  
 常に太陽の周圍に行星を廻轉し宇宙の無限の系統を維持する所の夫の

全能なる引力作用を離れざるに似たり。

(二)眞の演説者の同情を有せざる可らば、彼の天地の間に立ち神の心に入り神の思想を集めて之を人間に傳ふ、彼の神人會合の媒介者あるが、抑も人を高むるには人に降らざる可らば、喚言せば人と同情せざる可らば、此同情の力の眞正なる演説家の一美質にして一の天性より一の經驗より聴衆を了解し其思想、感情、徳義、弱点、其會得す可きもの又會得す可らざるものを知り、恰も自身に彼等を附加して自身を彼等の一部と爲し、彼等の思想感情を分明に發言する代辦者となるべし、彼が實に衆人と密着の關係あるの彼が衆人の性質に感動せらるゝ事實に依て證すべし、衆人冷淡無頓着あれば彼の活氣を失ひ、衆人聰明熱心なれば彼の温情雄辯の人とあらん、加之吾人の動物電氣の如き者ありて演説者より發し聴衆を過ぎ再び演説者に歸ると謂ふんと欲

す、看よ聴衆密集して演説者が聴衆に密接する時其効果の最大あるの如何、是れ電線の完全して電流の通過に障害なきに由る、又聴衆に間隙ありて演説者の隔離せるとき其効果の甚少きの如何、是れ電流に障礙あるに由るのみ、時々爆發して演説者を獎勵する所の喝采拍手の何ぞ、是れ電氣の演説者より閃發し聴衆を經過し再び演説者に歸り電流の完全なるを感せしむる響なり、一演説家曰く若し聴衆小室に密集するときは余の其數の少きを憂へると、此言味ふべし。

聴衆の同情が演説者に強大なる勢力を興ふる事の容易に之を知るを得ん、當時演説者自身の實に擴大せられて巨大なる集合体の爲めに思ひ且感じつゝあり、其揚る聲の衆人の聲にして其顯はす感情の衆人の感情なり、故に彼の數百倍の權威と勢力とを以て演説するを得ん、グラッドストーン氏曰く演説者と聴衆との關係の猶は天と地との關係の如

し、天の地より水蒸氣の形に於て受取りしものを其後雨の形に於て返却すと、吾人尙ほ之に一言を加へん雨の形を以てするのみならず時としては雷電の形を以て返却すと。

嘗てチヤサム侯に演説家として偉功を成さしめしものは實に此同情なりき、彼は近世のデモスセニースと謂ふべし、デモスセニースが希臘の爲めに感じて語りし如く彼は英國の爲めに感じて語りたり、彼が英國の名譽と威嚴と自由の熱愛とを身に被ふて演説せしや其勢力は實に反對者を悉く壓伏するに餘りありたり。

此同情の最實際的結果の一は論歩を進むるに従ひ自身を境遇に適せしむるに在り、演説者は自ら望む結果を生せしや否を天性に知得し又は感得して之に應じ其語法を變化し得べし、シェリダン曰く余は下院の四分三は愚人なるを直に看破したれば彼等の上に多辯を費さずして最

直接の意見のみを述べたりと、或辯護士法廷に於て審判官に對し辯論を爲せし後、一友より其辯論の一部分を更に語るべしと求められければ答で言く、足下夫の黄色の胸服を着して重々しく見ゆる部長を見しや、彼の鈍き頭腦に一度に一觀念以上を留むる能はざるを以て余の彼の觀念に同じからざる可らずと決心し、彼の眼に依て彼が了得せしや否を認むるまでは反覆辯論したりと。

(三) 眞正の演説者の活氣を有せざる可らば、ハーツ曰く演説は半ば散文にして半ば詩歌ならざるべからず、シセロ曰く演説者は論理家、哲學家たるのみならず又詩人、俳優たらざる可らばと、實に然り、眞正の演説者の其眞性よりして將に自ら宣べんとする眞理を愛すべし、此場合に於る愛は凡て他の場合に於る如く其愛する物の美點を看取するを得せしむべし、其影像は日夜出現し常に彼の目前に在り、彼の之を

忘却する能はず全く其物に支配せらるべし、彼の實に自ら愛する眞理を看るの明白なるより聴衆にも亦之を看せしめんと熱望するに至らん、されど之を行ふに當り通常の言語の時として彼の下に打碎けて其目的を達せざる事あり、故に演説者の活氣を生せんと欲せば左の大胆なる二方案を用ふべし、第一、演説者の單に理會力にのみ訴へずして想像力にも訴ふべし、單に談論のみを爲さずして圖畫をも示すべし換言せば形容を用ふべし、一例を擧るにパーソが亞米利加殖民地の課税を非難するや只課税の危険を言ふを以て満足せし活動する形像を描て一層著しき警誠を興へたり、曰く「吾人の羊の毛を刈るに非ずして狼の毛を刈りつゝありと、ラレフ亦其世界史に於て凡ての艱難、苦勞、害惡の終に死に依て除かるゝ事を説き、死を以て全能の有力者に似たるものとし叫て曰く、嗚呼雄辯、正直、強大ある死よ、爾の何人も忠

告し能ひざる者を説服し、何人も敢て爲し得ざる事を爲し、全世界の阿諛する者を輕蔑して世界より驅逐せり、爾の人の高慢、殘酷及慾望を悉く集合し之を被覆するに「茲に葬ふれり」The Jactの數語を以てせりと、然れども第二に演説者の音に想像力に訴ふるのみならず時として五感に訴ふるを要す、換言せば俳優と爲るべし、世人の知る如く演説に演劇の手段を挿入する事に就ての痛く之に反對する者あり、ソーパー説教を論し、一喝して曰く故に鏡面に對し實修したる凡ての演劇的態度、睇視、發動を去れど、然れども演説中屢々些少の動作が有効あるのみならず又必要なる場合あるや全く疑なし、例へば二人對話するに當り双方の問答を報告せんと欲せば、此二人を全く同一の音調と風采とを以て現出するの愚昧にして且無理の事あり、故に演説者の双方に相異の音聲と形狀とを興へ、斯く言語容態を少しく變化すれば

聽衆をして或度までの其語る者の誰あるを見聞せしむるを得べし。

(四)大演説者の熱情を有せざる可らば、物質界に於て勢力の熱に變化し得る如く心靈界に於ても亦其然るを知る、演説者の沈思したる全真理の其心の諸能力を刺激して強烈なる動作を起し、此動作の熱の形を顯はすべし、其音調は高低ありとも、其發聲は遲速ありとも、其用語の明白或の婉曲ありとも、何れにせよ熱情の溢るは明に之を視るべし、即ち其顔の輝き、眼の閃き、語々燃へて句々熱を生じ、滔々として河水の決する如く、全身焰火に包まれたるが如きものあらん。

焰火に包まれたる演説者の直に聽衆を感動し、其中の可燃質の熱語の雨下するに依て燃へ上り、先づ軟柔となり、次に鎔解し、流動して殆んど如何なる形狀にも融化せんとし、聽衆全く演説者に左右せらるゝに至るべし、傳へ言ふセント、ベルナードの雄辯の人心を生擒するの

甚しきより母の其子を隠し妻の其夫を隠し以て彼の爲めに寺院に奪ひ去らるゝを防きたりと。

此眞演説者の熱情の屢々偽演説者に摸擬せらるゝとありと雖も卑劣なる摸擬の容易に發見せらるべし、眞演説者の火の堅固なる思想を以て養ひれ恒久不變の光を放ち、偽演説者の火の糠殻を以て養ひれ暫時の後消滅して只煙の残るあるのみ。

(五)大演説家の高尚なる品格を有せざる可らず、千八百八十年三月一日紳士エヂンボルクの音樂會館に行き一大演説家を聽きたり、曰く余の彼の政策を信せずと雖も百雷の轟くが如き喝采に迎へられて老練なる一政治家が演壇に現はれしとき、余の視線に觸れし者の如何なる人ぞ、彼は最近五十年間最も誠實なる思想家とし運動者として公衆の前に立ち、公平寛大なる心を以て専ら眞理を探り、若し自ら過失あるを

知れば之を告白するに躊躇せず、餘暇あれば文學科學の門に逍遙して餘念なく、一朝大事件起れば雄辯滔々全歐洲に號令を下す如く響き、捕へられて牢獄に在る政治上の囚人を慰め、暴君をして玉座に震慄せしめ、七十歳の高齡に於て活氣熱心尙は舊の如く、其確信の爲めに何時にても反對者と雌雄を争ふの勇氣尙は勃々たり、余此人を一見するや曾て彼が爲したる事、又尙は是より爲さんと欲する事杯想起して、未だ役か口辱を開かざるに余の既に半ば其説に感化せられたりと、ヤンニンゴ曰く雄辯の源泉唯一あり、内部の生活——思想の力と感情の力——是あり、アリストトル亦曰く演説者が信用を得る原因三種あり、深慮と佳美と自ら心に興味を有するとは是なり、是故に品格の演説者の諸資格中緊要なるものにして之を缺けば他の諸資格の全く無効あり、一の證據にして他の唯草案たるのみ、一の實例にして他の唯教

訓たるのみ、一の正金にして他の唯約束手券たるのみ、一の實物にして他の唯實物の陰影たるのみ、畢竟高尚なる品格の演説者の諸資格の全部を掌握すといふも可なり、演説者の廉潔賢明なるべく就中同情と博愛とに満さる可らず、而して奮斯くあるのみならず、當に斯くあるべしと明白に聴衆に見へざる可らず、古代の預言者、使徒、殉教者等の此資格に就き大に今日の人にも益する所あるべし。以上の真正なる演説者に要する特別の資格なるが、尙ほ茲に最重要の問題あり、即ち未だ口述を聴かず只文章として傳へられし演説を學ぶの如何、換言せば如何にして演説を文學の一部として研究すべきや、其答甚だ簡明なり、既に前に述べし如く演説の効能の大きに當時の境遇に依るものなれば吾人の常に數種の事情即ち演説者の性質、演説を爲したる時の状態、聴衆の性質を考察せざるべからず。



吾人の悉く之を追想して更に之を活かしめ、而後吾人の或境遇に於て或聴衆に演説しつゝありと想像し、高聲に其原文を口演すべし、斯くすれば多少當初の勢力と美妙とを窺ふを得ん、例へば英語中の最大演説と稱すべきシエキスピーアの作に係るジュリアス、シーザー中のマック、アントニーの演説に就き其價值を測らんとせば、吾人先づアントニー其人と爲り、暫時自ら放縱、伶俐、堪能なるアントニーなりと想像すべし、次にシーザーの殺害とブルタス及ケシアスの自由の宣告とに由來せし激動の空氣を自ら呼吸しつゝありと想像し、次に目前に夫の怠惰、貪慾、多頭鬼たる羅馬愚民を集合せんと試み、最後に以上想像の感化を受けつゝ、該演説を朗讀すべし、若し善く悉く之を爲さば恐らく全演説の驚くべき技術、勢力、美妙を味ふを得ん。看よ該演説者の先づ暴民を和らげん爲めシーザーは貪慾なりとの衆説に同意せし

が、同時に彼等をしてシーザーが貪慾ならざりしを示す爲めに熟知したる事實を想起さしめたり、此事實の陳述は大に彼を感動して暫時猶豫せざるを得ざらしめしが、彼が中止せし間聴衆が其傍に群り來る摸樣あるを知りたれば、次に彼は人性中最強情慾の一たる好奇心を刺激して衆人を憤激の頂點に達せしめ、シーザーの意志を維持し之を讀むを拒みしがシーザーが衆人を其相續者と爲したる事を暗示したり、今や群民はシーザーに愛情を注ぐに至りしが彼は未だ以て足れりとせま群民をして殺害者を惡ましめんとし、是が爲めシーザーの表衣を携へ殺害者の短劍に穿たれし數孔を指示し、終に被覆を投げ遣て死体を群民に示したり。

アントニー 友よ、羅馬人よ、國人よ、余に諸君の耳を貸し給へ、余の來りしはシーザーを讃めん爲めに非ず彼を葬らん爲めな

り云々

(原文長さに付以下之を略す)

## 第八章 心理學

多年の間世人は身体上の知識が治療術に必要なを知らざり、疾病の治愈は偶然若くは天運に出るが如く思ひ、時としては不案内の草根本皮など用ひ、時としては符呪祈禱に依頼し、愚夫愚婦の如きは荒唐難解の呪文を病人の傍に誦し以て疾病其者を威嚇し退去せしめんとしたり、然るに現今に於ては其風甚だ之に反し、苟くも醫師たらんと欲する者は幾多の歳月を費し精細に身体を試験し、各種の器關と其官能とを學び、人身構造の諸法則を學ばざる可らざり、而して其治療の成否は一に此法則を補助し指揮する力の如何に由るものとす。

心の虚弱疾病を治療する法も亦之に同じ、從來の教訓は無稽の藥材

——精神上的の藥材——を用ひ符呪祈禱に依り、其爲す所大に魔法家に類し、例へば杖を手にして病人の傍に立ち數回之を打振り難解の祈禱文を誦し病人亦尋て之を反覆誦讀し以て無智惡徳を驅逐し得るものと想ひたり、然るに現今に至り此風習も亦大に變史せられ、教育者は心理學を知り、諸能力の性質を會得し、其教授法を精神の諸法則と和合するの必要なを悟るに至れり。

扱て凡て篤志の研究者は汝自身の教育者と爲るを要す、汝は何時までも教員講師の指導を受る能はざるを以て其余は汝自身の資力に依頼せざる可らず、汝は何時までも箸や匕にて父母より養はるゝを得ざれば汝自ら奔走して食餌を獲ざる可らず、若し眞に自ら理性動物たらんと欲せば宜しく自身の教育を連續すべし、人の教育の最善なる部分は實に自修に在り、若し偉人俊傑の生涯を學ば、其偉人たり俊傑たりし

資格は學校内にて受得せしに非ず自己の心力より得たるに起因するを  
發見するならん、故に自修は極めて必要なり。

然れども茲に起る第一の疑問は「如何して此自修を行ふべきか」と云ふ  
に在り、今之に答ふるには唯一の確實満足なる法あり、即ち汝は内部  
を視察し心理學を知らざる可らず、是れ頗る明白にして吾人は殆んど  
之を説明するを耻る者なり、汝は心意の諸能力に於ける自然の活動を  
刺激し指揮するに非ずんば決して心意を發育せしむる能はず、而して  
此能力の活動は常に留心注意するに非ずんば之を知る能はず、實に汝  
は或偉人に摸擬し其の方法に従ふを得べしと雖も、其方法は恐らく汝  
に取りては重大に過るならん、サウルをして強勇ならしめし甲冑はダ  
ビットに取りて柔弱且阻礙なりしならん、兎に角全く暗中に動作せば  
充分汝の力を表現する所以を知らざるべし、故に凡て聰明成功の學者

たらんと欲する者は先づ心理學を知らざる可らず。

今や第三の問題に來れり、如何なる書籍より心理學の智識を得んか、  
是れ甚だ困難なる問題なり、蓋し一般に心理學の眞理を正確完全に説  
明せしと認むべき書籍なし、此學に於ては他の科學に於る如く後進者  
が先進者の研究を中止したる点を繼續して之を完成せしめたる例證に  
乏しく、却て後進者は先進者の建築を破壊して自家を立てんとし、其  
結果として學者毎に其系統組織を異にするの觀あり、又其理論も深奥  
微精に入り通常の頭腦に解し難きものあり、其一例として哲學の門戸  
に横はる問題を取り、吾人は如何して物質界を理會するかと尋ぬる  
に、吾人は或印象の神経系に爲さるゝを知れども、此印象が心に感ず  
る所以、感覺が思想と爲る所以に至ては之を知らず、物質と精神との  
間の深淵は抑も思辨の始めより哲學者が屢々架橋を試みたる所なるが

皆能く功を奏せず、只確定立證すべからざる理論を吾人に興へしのみなるが故に實際の價値あるを見ず。

然れども幸に心理學に於ては他の科學に於る如く用書の必要少し、人々知識を得るの最善法即ち自身を経験するに由りて知識を得べし、汝の試験室は汝の心にして其中には種々の要具あるを以て安全且容易に之を携帯し家の内外を問はず何處に於ても研究するを得べし、若し正當なる方法を用ふれば此研究を爲すは甚容易の事にして知覺力、記憶力、想像力、判斷力等心意上の作用を順次に試験し、白紙の一片を見、蒼天を記憶し、白鳥を想像し、死亡の確實を判斷すると等一々簡單なる例を擧げ、全く了解する迄は一時の注意を一事に限るべし、若し如斯して尙ほ了解せざるときは坐右の心理書を執りデウガルド、スチワートの著書にせよ、サーウヰリアム、ハミルトンの講義にせよ、ハーバ

ート、スベンサーの心理學にせよ、目下研究中の題目に關して諸家の論説を學ぶべし、然るときは假令真理の全躰を發見せずとも少なくとも汝を助くべき或者を發見するならん、何事を爲すにせよ直に諸家の説を信用すべからず、宜しく目前に現はしたる簡單の例に訴へて各説を試験すべし、蓋し斯法に據れば多少心理學上の知識を得ざるはなし。然れども茲に第三の問題あり、如何して此知識を通常の用に供すべきか、之に答ふるに當り吾人は心理學上に認定せられたる或事實又は或法則を引用して、先づ各法則を説明し、次に理會力の訓練に之を用ひ得べきを示し、終に此法則は知力上拔群なりし人々が有意的又は無意的に採用せしものなるを證明せん。

### 心の統一

現今心理學者は皆等しく心の統一を主張せり、吾人は普通の言語を以